

文学通信

なぜ古典を勉強するのか

国語の授業の作り方

三島由紀夫は一〇代をどう生きたか

全訳 男色大鑑〈武士編〉

全訳 男色大鑑〈歌舞伎若衆編〉

紙が語る幕末出版史

新徴組の真実にせまる

新 神風と悪党の世紀

中華オタク用語辞典

二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎

江戸の子どもの絵本

波多野華涯書簡集〈品切〉

歴史情報学の教科書

〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典

ネット文化資源の読み方・作り方

真山青果とは何者か？

古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。

注釈・考証・読解の方法

草の根歴史学の未来をどう作るか

デジタル学術空間の作り方

薩琉軍記論

六波羅探題 研究の軌跡

怪異をつくる

江戸初期の香文化

近世前期江戸出版文化史

江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽

古典教育と古典文学研究を架橋する

「国文学」の批判的考察

日本の歴史を解きほぐす

好古趣味の歴史

城壁

信長徹底解説

杞憂に終わる連句入門

ここまでわかった 戦国時代の天皇と公家衆たち

読書の歴史を問う

説話文学研究の最前線

高校に古典は本当に必要なのか

二十四節気で読みとく漢詩

REKIHAKU 特集・されど歴史

古典の未来学

日本の歴史を原点から探る

書誌学入門ノベル! 書医あづさの手控〈クロニクル〉

王朝物語の表現機構

REKIHAKU 特集・いまこそ、東アジア交流史

はじめに交流ありき

漢字を使った文化はどう広がっていたのか

東アジアに共有される文学世界

東アジアの自然観

近代平仮名体系の成立

虚学のすすめ

自由律俳句と詩人の俳句

『阿毘達磨集論』の伝承

日本の歴史を問いかける

これからの古典の伝え方

軍記物語と合戦の心性

戦国時代と一向一揆

言いなりにならない江戸の百姓たち

★刊行図書のご案内★

いままで刊行した57冊の本を紹介します

2021.5



〒114-0001 東京都北区東十条1-18-1 第1棟101

電話 03-5939-9027 FAX03-5939-9094 info@bungaku-report.com

<https://bungaku-report.com/>

高校に古典は本当に必要なのか

高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ

長谷川凜、丹野健、内田花、田川美桜、
中村海人、神山結衣、小林未来、牧野かれん、
仲島ひとみ編

ISBN978-4-909658-36-4 C0095

A5判・並製・280頁予定

定価：本体1,800円（税別）



高校に古典は本当に必要なのか。「高校生の声を伝えて、肯定派の目を開きたい。高校生という新たな視点で否定派の心を開きたい」。

現役高校生が、当事者として高校生にアンケートを実施し、議論の場を作り、考えたことは何だったのか。2020年6月6日にオンライン開催された、高校生が高校生のために考えたシンポジウム「高校に古典は本当に必要なのか」の完全再現+終了後のアンケート+企画に至るまでの舞台裏+編者による総括です。

2019年、明星大学でシンポジウム「古典は本当に必要なのか」は、本書の編者の高校生にとっては、話がかみ合わない上に、問題点や疑問が放置されたと感じられ、とても満足できるものではありませんでした。そして開催されたのがシンポジウム「高校に古典は本当に必要なのか」です。

議論は果たしてどこまで進んだのか。現役高校生という視点は有効だったのか。これを読む私たちは、高校生たちの考えをどこまでくみ取ることが出来るのか。

古典不要論を考える際の基本図書ともなった、勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』（文学通信）の続編ともいべき本です。

【目次】

はじめに（仲島ひとみ）／凡例 高校生メンバー紹介／**第1部 議論の土台を整える—「高校に古典は本当に必要なのか」を考えるまえに**／1. 「高校に古典は本当に必要なのか」のコンセプト／2. 前回のシンポジウム「古典は本当に必要なのか」論点まとめ—近藤泰弘先生、ツベタナ・クリステワ先生の主張も加えて／3. 現役高校生の視点—高校生に実施したアンケート結果発表／4. ディスカッション—否定派・肯定派の認識を問いただす／**第2部 高校に古典は本当に必要なのか**／1. ディベート—高校の授業で古典を学ぶことに意義はあるか／2. ディスカッション—自由討議／3. 閉会のあいさつ／**第3部 アンケート集計**／**第4部 シンポジウムに至るまで—高校生による書き下ろし**／1. シンポジウムの出発点／2. 企画の骨組みが決定／3. ゲストパネリストとのやりとり／4. 高校生に実施した「こてほんアンケート」／5. 申し込み・Twitterでの発信／6. プログラム③／7. プログラム④／8. プログラム⑤／9. プログラム全体の流れ／10. 積み重ねてきた対話／11. オンライン開催／12. おわりに／**第5部 共に社会を作る仲間として後進を育てようとするのなら（仲島ひとみ）**／1. まとめにあたって／2. 「こてほん2019」をどうとらえていたか／3. 今回出た論点の整理／4. 教育学的な観点から／5. 当事者の声をどうとらえるか／6. まとめと展望／あとがき

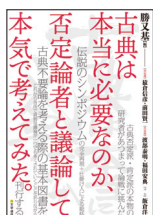
古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。

勝又基編

ISBN978-4-909658-16-6 C0095

A5判・並製・220頁

定価：本体1,800円（税別）



古典否定派・肯定派の本物の研究者があつまって論戦に挑んだ、2019年1月の伝説のシンポジウム「古典は本当に必要なのか」の完全再現+仕掛け人による総括。古典不要論を考える際の基本図書となった本書を、これから各所で真剣な議論が一つでも多くされていくことを祈りながら刊行します。

2015年のいわゆる文系学部廃止報道以来、人文学や文学、古典の危機について論じる会合は少なからず開催されて来ましたが、編者は疑問を持っていました。それらはすべて身内の怪気炎にすぎなかったのではないかと。本当にインパクトのある議論をするためには、反対派と対峙しないまま、必要論だけを語ってはダメだ... 本物の反対派を招聘し開催せねば。そこで開催されたのが、2019年1月のシンポジウム「古典は本当に必要なのか」です。登壇者は、【否定派】猿倉信彦・前田賢一【肯定派】渡部泰明・福田安典【司会】飯倉洋一の各氏です。

このシンポジウムは、インターネットでも中継され、使われたハッシュタグ「#古典は本当に必要なのか」は、センセーショナルでもあったため、シンポを離れトレンド入りし、多くの人がこのタグで、自らの古典観を語ることとなりました。

このシンポジウムで否定派が張った論陣はどのようなものだったのか。これに対して古典の研究者や中高の国語教員はどう反論したのか。その議論から浮かび上がった問題は何だったのか。本書はその様子を再現したうえで、当日のアンケート、インターネットによるコメント投稿を収録し、登壇者のあとがきを加え、最後に編者自身の総括「古典に何が突きつけられたのか」（3万2千字）を収録します。本書全体で、より深い議論への橋渡しにしようとするものです。人文学や文学、古典の危機について考えていく際の必読書にはからずもなっています。

【このシンポジウムを一書にまとめたいま、筆者が望むことは二つある。

第1に、「古典は本当に必要なのか」という問いに対して、それぞれが独自の回答を考えていただきたい、ということだ。筆者が提示したのは、一つの案でしかない。できれば登壇者のようなキャリア半ばをすぎた人々ではなく、20～30代のこれからを担う世代にこそ、真剣に考えてほしい。この世代は、「世も末だな」と嘆くだけで済まない。放っておけば先細りが確実な古典の担い手として、実際に世の中を動かさなければならないのだから。

第2に、古典不要派、文学不要派と対峙する試みが、このあとも別の場所で開催されてほしい、ということだ。今回登壇いただいた否定派の方々は、決して特異な少数派ではない。サイレントマジョリティは、われわれが考えるよりはるかに多いのである。もちろん、登壇し、名前と顔をさらして堂々と意見を述べてくださる否定派を探すことは、大変難しいだろう。しかし、それがもう一度叶えば、議論はまた別の深まりを見せるにちがいない。】...あとがきより

軍記物語と合戦の心性

佐伯真一

ISBN978-4-909658-54-8 C0095
A5判・上製・カバー装・584頁
定価：本体10,000円（税別）

前近代の日本では、合戦即ち戦争をどのように考え、感じ、表現していたか。それを考えることが、本書の目的である――。本書は、人々の合戦に関わる思考や感情を包括しつつ、歴史叙述、信仰、異国合戦、武士道など、多岐にわたるテーマを扱い論じていく。分析の対象は『平家物語』『曾我物語』『太平記』『予章記』などの諸作品のほか、「軍記」「軍神」「良将」「武士道」といったいっけん自明な言葉の概念にも及ぶ。【前近代の日本では、合戦即ち戦争をどのように考え、感じ、表現していたか。それを考えることが、本書の目的である。書名に用いた「合戦の心性」は落ち着いた言葉だが、たとえば武器を取って戦っていた者はもちろん、突撃を命ずる者、戦いの周辺で被害に遭った者、勝利や無事を祈っていた者、ただ傍観していた者、そして後にその物語を語る者・聴く者等々、さまざまな人々の合戦に関わる思考や感情を包括するつもりで選んだ表現である。】…「はじめに」より

【目次】
はじめに―本書の内容と構成―



- 第一部 軍記物語とは何か**
 - 第一章 「軍記」概念の再検討／第二章 『平家物語』は「軍記」か／第三章 『義貞軍記』と武士の価値観／第四章 一五世紀の「軍記」―『倭国軍記』の紹介と翻刻―
- 第二部 『平家物語』の合戦**
 - 第一章 異能の悪僧達―延慶本『平家物語』橋合戦の読み方―／第二章 屋島合戦と「八島語り」／第三章 小坪坂合戦と三浦一族／第四章 「馳組戦」をめぐる／第五章 「越中前司最期」と合戦の功名
- 第三部 軍記物語と歴史叙述の諸相**
 - 第一章 『曾我物語』と敵討／第二章 『太平記』と「良将」の概念／第三章 『保曆間記』の歴史叙述／第四章 『予章記』の歴史叙述
- 第四部 合戦と信仰**
 - 第一章 天狗・怨霊と合戦／第二章 後白河院と「日本第一大天狗」／第三章 『平家物語』と鎮魂／第四章 軍記物語と鎮魂／第五章 「軍神」（いくさがみ）考
- 第五部 〈異国合戦〉と日本文学**
 - 第一章 〈異国合戦〉論の展望／第二章 〈異国襲来〉の原像／第三章 神功皇后説話の屈折点／第四章 「耳塚」と「耳堂」の史実と伝承
- 第六部 近代の武士観・「武士道」論と軍記物語**
 - 第一章 「兵の道」・「弓箭の道」考／第二章 「武士道」研究の現在―歴史的語彙と概念をめぐる―／第三章 近代「武士道」論と軍記物語の懸隔／第四章 近代の武士観と軍記物語研究付論 『滝口入道』の武士観
初出一覧 あとがき 人名・神仏名索引 書名・作品名索引

これからの古典の伝え方

西鶴『男色大鑑』から考える

畑中千晶

ISBN978-4-909658-53-1 C0095
四六判・並製・304頁
定価：本体1,900円（税別）

古典を次の時代へと読み継いでいくためにはどうすればいいのか。古典文学研究・古典文学教育の危機にどのように立ち向かうべきかという、一人一人に突きつけられた問いに対してどう答えるのか。新たな読者に向けて開いていくための、これからの古典の伝え方を、『男色大鑑』や江戸の文学作品を題材に、創作への欲望をかき立てるといった視点から考えていく本。『男色大鑑』のコミカライズからはじまった、あらたな現代語訳の登場、演劇化といったアダプテーションの展開は、作品研究にどのような実りをもたらすことになり、古典の伝え方のポイントとして何が浮上したのか。多方面から考え尽くす。また、江戸の文学作品を題材に、現代の文化状況に引きつけつつ創作者の視点を探ることを試みたり、比較文学研究の手法を応用し古典文学へ誘う方法の実践例も収載するなど、古典文学の新たな開き方・伝え方を考えます。これからどう古典を伝えていくか、ヒント満載の本です！

【目次】
はじめに
第1部 古典を現代に伝えるには―『男色大鑑』の場合―

- 第1章 B L コミカライズ・現代語訳・演劇化**
 - 【古典の再発見】第1節 それはB Lから始まった
 - 【基礎知識】第2節 『男色大鑑』の世界
 - 【現代語訳の実践】第3節 『全訳 男色大鑑』の方法
- 第2章 古典を読む方法―実践編―**
 - 【アダプテーションから読む】第1節 〈萌え〉を共振・増幅させていく〈創作〉
 - 【挿絵を読む】第2節 挿絵の嘘と〈演出〉
 - 【〈演出〉から読む】第3節 男色の道をあえて選ぶ男たち
 - 【演劇化の効能】第4節 雪月花の舞台が伝えたもの
- 第2部 現代の感性で古典を切り取る**
 - 第1章 創作のヒントとしての古典**
 - 【恐怖の空白】第1節 江戸の〈行きて帰りし物語〉―『西鶴諸国はなし』の場合―
 - 【偏愛の暴走】第2節 江戸の〈二次創作〉―『風流源氏物語』の場合―
 - 【ネタ破りはリトマス試験紙】第3節 江戸の〈コピペ〉―『花実御伽硯』の場合―
 - 第2章 〈萌える〉古典**
 - 【設定とキャラクター】第1節 B L コミックス『囁く鳥は羽ばたかない』と『男色大鑑』の共通点
 - 【比較文学の発想】第2節 メディアも時空も飛び越えて
おわりに―〈コピペ〉とプライオリティー
補足資料 文献一覧



はじめに交流ありき

東アジアの文学と異文化交流

染谷智幸編

ISBN978-4-909658-44-9 C0320

A5判・並製・カバー装・448頁

定価：本体2,800円（税別）



第1巻は東アジアの文化と異文化交流をテーマに、まず「交流」「関係」を設定し、そこから生みだされた往還、交易と文化、海域と伝承、聖地、島嶼の文化等を考える。「文化」を先にする発想からは、国家・民族の独我論に陥ってしまう危険性があることに加え、東アジアの海域やその周辺への理解は乏しいものになるであろうという姿勢のもと生み出される、新たな東アジア交流史がここに誕生した。

【目次】総序 東アジアの文化と文学＝小峯和明／序 **はじめに交流ありき**—東アジアの文学と異文化交流＝染谷智幸／**第1部 東アジアの往還**／1 渡海記と漂流記—十六世紀以前を中心に＝鈴木彰／2 漂流と漂着—『韃靼漂流記』を中心に＝水谷隆之／3 遣唐使の文学—往来する人々＝水口幹記／4 遣明船と策彦周良—黒衣の交渉人＝空井伸一／5 大航海時代のキリスト教とアジア—ザビエルの鹿児島伝道＝岡美穂子／6 朝鮮通信使と燕行使の文学＝高橋博巳／7 琉球と唐・ヤマトの交際—交叉—七一四年の江戸立を中心に＝島村幸一／8 崔致遠と東アジア—『補安南録異図記』を中心に＝金英順／9 日朝文人の交流—《兼葭雅集図》の例から＝鄭敬珍／**第2部 海域と伝承**／1 黒潮文化圏と新「海上の道」—柳田国男の想像力＝角南聡一郎／

2 農業国家アンコールの「航海神」観音＝宮崎晶子／3 媽祖と海域の文化＝菊地章太／4 日本海海域の文芸—幸若舞曲『笈篋』小考＝宮腰直人／5 海域生物をめぐる言説—シャチ・クジラを事例として＝杉山和也／6 朝鮮の海域伝承—玉英、東アジアを放浪する＝朴知恵／**第3部 島嶼の文化**／1 港市と島嶼の文学—北九州海辺の伝承世界から＝菊地仁／2 中台交流史からみる台湾の宗教文化—三山国王信仰を事例として＝志賀子／3 台湾の鄭成功伝承＝小俣喜久雄／4 奄美のユタ伝承と東アジア＝福寛美／5 八重山の文化＝澤井真代／6 古代中国と済州島の交流＝黄曉星／7 八重山・小浜島の念仏歌＝酒井正子／**第4部 交易と文化**／1 海賊と海商＝森田雅也／2 東南アジア交易と中国人町・日本人町＝松浦史明／3 明末白話小説と海外貿易＝中島楽章／4 長崎民衆の異国認識＝位田絵美／5 経済小説の胎動と東アジアの交易—経済以前と貨幣の歴史＝染谷智幸／6 文化力〈ソフトパワー〉と政治・経済—朝鮮半島のルネサンスと南北対話＝Emanuel Pastreich／7 仏教経典と長者伝承＝堀部正円／8 東アジアの紙銭＝森田憲司／9 南シナ海の海盜—張保仔と女海賊鄭一嫂＝松尾恒一／**第5部 東アジアの聖地**／1 五台山の仏教文化—東アジアが育んだ歴史＝小島裕子／2 普陀山と観音信仰＝張龍妹／3 泰山と日本の古典文芸—泰山名句と封禪説話を中心に＝李銘敬／4 金剛山像—金同伝説とその変遷＝龍野沙代／5 〈聖地〉の近代化と東アジア＝染谷智幸／6 反逆者たちの聖地＝丸井貴史



漢字を使った文化はどう広がっていたのか

東アジアの漢字漢文文化圏

金文京編

ISBN978-4-909658-45-6 C0320

A5判・並製・カバー装・452頁

定価：本体2,800円（税別）

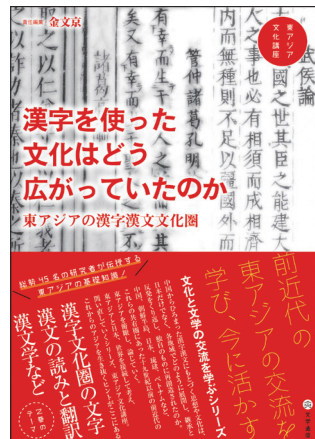


第2巻は東アジアの漢字漢文文化圏をテーマに、漢字文化圏の文字、漢文の読み方と翻訳、漢文を書く（変体漢文など）、近隣地域における漢文学の諸相、漢字文化圏の交流—通訳・外国語教育・書籍往来などの問題を設定し、漢字にまつわるありとあらゆる視点を提供しつつ初書。本書で提供される視点による漢字文化観は、今後新たな発想を生み出す源泉となるであろう。

【目次】

序 東アジアの漢字・漢文文化圏＝金文京／**第1部 漢字文化圏の文字**／1 漢字の誕生と変遷—甲骨から近年発見の中国先秦・漢代簡牘まで＝大西克也／2 字音の変遷について＝古屋昭弘／3 新羅・百濟木簡と日本木簡＝李成市／4 ハングルとパスパ文字＝鄭光／5 異体字・俗字・国字＝笹原宏之／6 疑似漢字＝荒川慎太郎／7 仮名＝入口敦志／8 中国の女書（nǚshū）＝遠藤織枝／9 中国地名・人名のカタカナ表記をめぐる＝明木茂夫／**第2部 漢文の読み方と翻訳**／1 日本の訓読の歴史＝宇都宮啓吾／2 韓国の漢文訓読（釈読）＝張景俊（金文京訳）／3 ウイグル語の漢字・漢文受容の様態—庄垣内正弘の研究から＝吉田豊／4 ベトナムの漢文訓読現象＝Nguyen Thi Oanh／

5 直解＝佐藤晴彦／6 諺解＝杉山豊／7 ベトナムにおける漢文の字喃訳＝嶋尾稔／8 角筆資料＝西村浩子／9 日中近代の翻訳語—西洋文明受容をめぐる＝陳力衛／**第3部 漢文を書く**／1 東アジアの漢文＝金文京／2 仏典漢訳と仏教漢文＝石井公成／3 吏文＝水越知／4 書簡文＝永田知之／5 白話文＝大木康／6 日本の変体漢文＝瀬間正之／7 朝鮮の漢文・変体漢文＝沈慶昊／8 朝鮮の吏読文＝朴成鎬／9 琉球の漢文＝高津孝／**第4部 近隣地域における漢文学の諸相**／1 朝鮮の郷歌・郷札＝伊藤英人／2 朝鮮の時調—漢訳時調について＝野崎充彦／3 朝鮮の東詩＝沈慶昊／4 句題詩とは何か＝佐藤道生／5 和漢聯句＝大谷雅夫／6 狂詩＝合山林太郎／7 ベトナムの字喃詩＝川口健一／**第5部 漢字文化圏の交流—通訳・外国語教育・書籍往来**／1 華夷訳語—付『元朝秘史』＝栗林均／2 西洋における中国語翻訳と語学研究＝内田慶市／3 朝鮮における通訳と語学教科書＝竹越孝／4 長崎・琉球の通事＝木津祐子／5 佚存書の発生—日中文学の交流＝住吉朋彦／6 漢文による筆談＝金文京／7 中国とベトナムにおける書籍交流＝陳正宏（鶴浦恵訳）／8 中国と朝鮮の書籍交流＝張伯偉（金文京訳）／9 東アジアの書物交流＝高橋智／10 日本と朝鮮の書籍交流＝藤本幸夫／11 日本における中国漢籍の利用＝河野貴美子



東アジアに共有される文学世界

東アジアの文学圏

小峯和明編



ISBN978-4-909658-46-3 C0320

A5判・並製・カバー装・460頁 定価：本体2,800円（税別）

第3巻は東アジアの文学圏をテーマに、東アジアの学芸、宗教と文学、侵略と文学、歴史と文学、文芸世界などの問題を設定し、東アジアに共有される文学世界を俯瞰し論じる。「東アジア文学史」の不在により、鮮明にはなっていなかった東アジアの文学を明らかにすべく、その言語表現に即した想像力や思想性、それに基づく形象力、再生力を検証する。ここから「東アジア文学史」がはじまる。

【目次】序 東アジアの文学圏＝小峯和明／第1部 東アジアの学芸／1 儒教の世界―近世日本の場面から＝中村春作／2 東アジアの注釈学―宋・遼・高麗・日本をつなぐ〈注釈の知〉＝小川豊生／3 医学と本草学―十六世紀以前の中国と日本を中心に＝岩本篤志／4 類書の「世界」＝井上 亘／5 絵と絵師にみる日本と中国＝楊 曉捷／6 軍書・軍学・兵法＝井上泰至／7 中国古代兵学―漢文圏の兵学研究＝司 志武／8 占術書―文芸交流の事例として＝Matthias Hayek／9 盤上遊戯＝原 克昭／第2部 東アジアの宗教と文学／1 仏伝の変成―浄飯王の物語＝趙恩鶴／2 法華経の文学的な営み―『本朝法華験記』を事例として＝馬 駿／3 道教と神仙―『列仙伝』から『列仙全伝』へ＝千本英史／4 東アジアと陰陽道＝山下克明／5 キリシタン文学と東アジア―キリシタン版の一側面＝神田千里／6 韓国の檀君神話と檀君神話＝張 哲俊／7 北部ベトナムの宗教文化―九天

玄女信仰の発展＝大西和彦／8 須弥山と芥子―極大と微小の反転＝高 陽／9 仏陀の夢と非夢―西行伝への示唆をもとめて＝荒木 浩／10 神道と東アジア＝伊藤 聡／第3部 東アジアの侵略と文学／1 モンゴルの侵略とその言説―『越旬幽霊集録』を読む＝佐野愛子／2 倭寇と文学―中国明清文献にみる秀吉像を中心に＝陳 小法／3 壬辰倭乱とその文学＝松本真輔／4 琉球侵略と文学―〈薩琉軍記〉の世界＝目黒将史／5 蝦夷と北方の言説＝徳竹由明／6 亡命・拉致の文学＝樋口大祐／7 東アジアの鄭成功＝韓 京子／8 ベトナムの英雄像＝高津 茂／9 韓国から見た日本の耳塚＝魯 成煥／第4部 東アジアの歴史と文学／1 琉球の歴史叙述と説話＝木村淳也／2 朝鮮の野談と歴史書―戦乱ものを中心に＝野崎充彦／3 歴史と説話との交差―ベトナムの「剣湖伝説」を事例にして＝Pham Le Huy／4 正史と稗史の間隙＝洪 晟準／5 『三国史記』と『三国遺事』＝袴田光康／6 東アジアの地図を読む―十九世紀大坂商人の東アジア＝小林ふみ子／第5部 東アジアの文芸世界／1 才子佳人の世界＝鄭 炳説（金 英順訳）／2 かなとハングル、王朝と女性文学＝金 鍾徳／3 東アジアの笑話―滑稽の類似と相違＝琴 榮辰／4 『剪燈新話』と日本文学―『錢湯新話』から『浮世風呂』まで＝近衛典子／5 『剪燈新話』の東アジアへの展開と『金鰲新話』＝染谷智幸／6 「伝」の世界―『孝子伝』から『阿Q正伝』まで＝宇野瑞木



東アジアの自然観

東アジアの環境と風俗

ハルオ・シラネ編



ISBN978-4-909658-47-0 C0320

A5判・並製・カバー装・432頁

定価：本体2,800円（税別）

第4巻は東アジアの環境と風俗をテーマに、「地理、気候、文化」「四季の文化と詩歌―二次的自然の世界」「風俗と文化」「食文化と文芸」「年中行事と芸能」などの問題を設定し、東アジアの自然観を論じていく。自然とは何か、根源的に考える際に必須の一冊である。

【目次】序 環境と二次的自然●ハルオ・シラネ／第1部 地理、気候、文化／1 海と島の文学誌＝小峯和明／2 山と森の文化史―山林にて、虎と遭う＝北條勝貴／3 風水と文化―風水術の持つ宗教性＝宮崎順子／4 隠遁思想と文芸―山から都会へ＝陸晚霞／5 歌枕と名所―湯殿山から象潟へ＝錦 仁／6 災害と文学＝佐伯真一／7 女と妖怪―うぶめを中心に＝安井真奈美／8 脱人間中心主義の文学―石牟礼道子の《魂の秘境》＝野田研一／第2部 四季の文化と詩歌―二次的自然の世界／1 詩歌と物語の四季―〈冬の夜〉を中心に＝李 愛淑／2 詩歌と絵画・画賛の文化―日本中世禅林を中心に＝堀川貴司／3 庭園の意匠―古代インド・東アジアの方形池をめぐる＝多田伊織／4 屏風絵と貴族社会＝井戸美里／5 季節の哲学―麻衣、着れば懐かし＝天野雅郎／6 歳寒三友と四君子＝宮崎法子／第3部 風俗と

文化／1 化粧・髪型と文化＝平松隆円／2 染織の模様と文化＝小山弓弦葉／3 香と文化＝堀口悟／4 都市図の発達と風俗画＝崔 京国／5 肥前磁器に描かれた文様と古典文学＝Nguyen Thi Lan Anh／6 妓女と遊女の文化＝山田恭子／7 境界を越える名妓吉野＝渡辺憲司／8 春画＝山本ゆかり／第4部 食文化と文芸／1 食文化と料理＝原田信男／2 米や酒そして作物―韓国と日本の比較を通して＝伊藤信博／3 茶の文化と文芸＝石塚 修／4 年中行事と食―『宇多天皇御記』にみる＝劉 曉峰／5 ベトナムの竈神＝鍋田尚子／第5部 年中行事と芸能／1 東アジアの儺―鬼神往還祭儀＝野村伸一／2 年迎えと祖霊祭祀―古代からの伝承―歴史と現代＝松尾恒一／3 舞・踊り・歌謡＝諏訪春雄／4 シャーマンと芸能―折口信夫を読み直すために＝斎藤英喜／5 政治と怨霊、鎮魂―怨霊となった崇徳院と端宗＝韓正美／6 パンソリと浄瑠璃の「語り」＝西岡健治



近代平仮名体系の成立

明治期読本と平仮名字体意識

岡田一祐

ISBN978-4-909658-48-7 C0081
A5判・上製・カバー装・368頁
定価：本体7,000円（税別）

「一九〇〇年、小学校令施行規則により平仮名の字体が統一された」。本書は、この一行に対する幾多の註釈である——。明治時代に現代の平仮名体系が確立した過程は現在まで描かれてこなかった。その欠を補うため、明治時代の小学読本の全体の調査に基づき、平仮名の字体に対する意識の変化を探り、近代平仮名体系の成立を描き出した初の書。成立より明治まで、書き手に任されてきた平仮名字体は、明治期に人為的な統制を加えられ、現代用いられている仮名字体が成立した。それを成り立たせた、明治期の平仮名の「字体意識」とはいったい何か。その意識の形成を読み解く。近代平仮名体系の成立を描き、「字体意識」という新たな観点から平仮名史の再構築を行う。

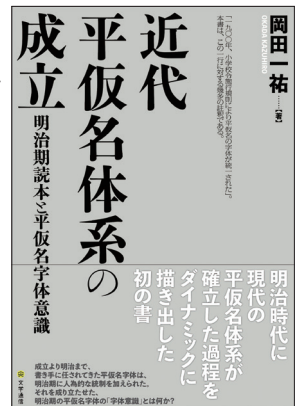
【目次】

第一部 はじめに

- 第一章 明治期読本の平仮名字体意識の諸問題
- 第二章 いろは仮名の来しかた—近世・近代における平仮名字体の体系化

第二部 近世の仮名字体意識の諸問題

- 第三章 江戸期のいろは仮名
- 第四章 教科書に用いる仮名字体—往来物における濁音仮名からみえるもの
- 第三部 明治期読本における平仮名字体意識の形成と変容
- 第五章 明治期のいろは仮名
- 第六章 明治検定期以前の読本の仮名字体
- 第七章 異体仮名表のかたちと字体
- 第八章 いろはならざる画一化のゆくえ—「かなのくわい」の画一化試案
- 第四部 小学校令施行規則第一号表に到るまで
- 第九章 明治検定期読本における字体の画一化過程
- 第十章 小学校令施行規則第一号表を読みなおす
- 第十一章 例に示す仮名と実際に用いる仮名の一致について
- 第十二章 「いろは」から「平仮名」へ
- 第五部 おわりに
- 第十三章 議論の整理と今後の展望
- 補論 平仮名字体記述法の批判的検討
- 附録 調査した読本と異体仮名導入
- 参考文献 後記 索引



自由律俳句と詩人の俳句

樽見博

ISBN978-4-909658-50-0 C0095
四六判・並製・352頁
定価：本体2,700円（税別）

伝統と呼ばれる「俳句」という形式はどういうものなのか。五七五の定型は果たして疑う余地のないものなのか。何ゆえ、定型から逸脱する自由律を選んだ人たちが現れたのか。本書は自由律俳句と詩人たちの俳句に焦点をあて、知られざる近代俳句史をあきらかにする。どのような作品が生まれ出され、それらの作品はいかに受け止められたか。俳人・詩人たちは形式をめぐりいかなる論争を繰り広げ、彼らによって生まれ出された雑誌・書物などのメディアとはどのようなものだったのか。蒐集された膨大な資料群を読みほどこき、多数の俳句作品を紹介しながら考証する。巻末には自由律の俳人・荻原井泉水の著作目録を付録として収録する。

【目次】

- 序にかえて 時代の生む魅力—中塚一碧楼の自由律句
- 第一章 自由律俳句について
- 1 総合誌『俳句人』と敗戦に直面した自由律俳人たち
- 2 松尾敦之『原爆句抄』など
- 3 『自由律』の創刊と生活の自然詩
- 4 荻原井泉水の戦後の出発(上)
- 5 荻原井泉水の戦後の出発(下)

- ／6 合同戦争俳句集『みいくさ集』が描いた銃後
- 7 改造社『俳句研究』における自由律俳句
- 8 昭和13年の『改造』『俳句研究』俳句欄
- 9 終戦直後の『暖流』と自由律俳句の理念
- 10 荻原井泉水が継承した芭蕉の精神(上)
- 11 荻原井泉水が継承した芭蕉の精神(下)
- 12 萩原蘿月と内田南艸、まつもと・かずや

第二章 自由律俳句の諸相

- 1 中塚一碧楼の句評と俳句
- 2 荻原井泉水の句評—草田男・虚子との違い
- 3 尾崎放哉と種田山頭火の短律句
- 4 橋本夢道の長律句
- 5 改造社『俳句三代集』別巻「自由律俳句集」
- 6 『層雲』が生んだ早逝の俳人・大橋樺木について
- 7 三重県で生まれた自由律俳句誌『碧雲』

第三章 詩人の俳句

- 1 英文学者詩人・佐藤清の俳句
- 2 国民詩人・北原白秋と自由律俳句
- 3 鷲巣繁男—流瀆の詩
- 4 木下夕爾—孤独に堪える
- 5 千家元麿の一行詩と俳句
- 6 北園克衛—モダニズム詩人たちの俳句
- 7 日夏耿之介—社交の俳句
- 8 ゆりはじめ—横浜大空襲を問いつける疎開派

付録・荻原井泉水著書目録抄
句集／井泉水句集年刊パンフレット／合同句集／全集／俳論・俳句入門書／芭蕉・一茶・子規関係／尾崎放哉・種田山頭火関係／随筆集、その他



書誌学入門ノベル! 書医あづさの手控

(クロニクル)

白戸満喜子

ISBN978-4-909658-41-8 C0000
四六判・並製・280頁
定価：本体1,800円（税別）

代々続く書医（書籍のお医者さん）の家に生まれたあづさは、早世した兄・葵に代わり、家業を継ぐことを決意する。しかし書籍について知識のなかったあづさは、見ただけで紙の原料がわかるふしぎな力を持った双子の妹・さくらとともに、修行に邁進してゆく――。

青春小説であり、書誌学入門でもあるという、本邦初の「書誌学入門」ノベル！

書誌学が小説という器にのり、その学問は自由に羽ばたき、猛烈な興味をかき立てるものに変貌します！ 圧倒的な書物への愛が溢れ出した、いままでになかった本です。

付録として「浅利先生の書誌学講座」（全10講）を完備。書誌学の基礎もわかります。人に話したくなる小ネタも満載。本を愛する全ての人に、必携の書です。

イラストは『国宝のお医者さん』（KADOKAWA）の芳井アキ。

推薦＝延広真治（東京大学名誉教授）、大場利康（某大規模図書館員）、瀬瀬くり（大屋書房）。

【目次】※この物語は、書誌学という学問の知識をベースに紡がれています。書誌学がどのような学問か知りたい方は、巻末付録

「浅利先生の書誌学講座」を一読してから、物語をお読みください。なお、「書医」という職業は架空のものです。

登場人物紹介 / I 東京編 / 其の一 虹色の本 / 其の二 遺されしもの / 其の三 謎解き / 其の四 漂泊の漢籍 / 其の五 通り雨 / 其の六 受け継ぐもの / 其の七 塞翁が馬 / 其の八 書医の血 / 其の九 熱に浮かされて / 其の十 時空をこえて / 其の十一 カナダからの手紙 / 其の十二 異邦の書 / 其の十三 縁は奇なもの / 其の十四 いざ京都 / II 京都編 / 其の一 はじめの一步 / 其の二 魅せられて / 其の三 助け舟 / 其の四 お世話係 / 其の五 書医の手 / 其の六 消息 / 其の七 配合の妙 / 其の八 血脈 / 其の九 その瞬間 / 其の十 決意 / 其の十一 邂逅遭遇 / 其の十二 父、帰る / 其の十三 本と虫 / 其の十四 つなぐ人 / 其の十五 それぞれの天命 / 其の十六 渡りに舟 / 其の十七 一人旅 / 【付録】浅利先生の書誌学講座 / 第1講 書誌学は本の考古学!? (by 林望氏) / 第2講 漢籍と目録学 / 第3講 和古書の装訂 / 第4講 和古書の書型 / 第5講 版本の部分名称 / 第6講 紙以前の書写材料と紙の登場 / 第7講 紙の普及と印刷技術の伝播 / 第8講 日本の印刷・出版史 / 第9講 古書の取り扱い方と保存・修復 / 第10講 日本の書誌学研究の広がり



王朝物語の表現機構

解釈の自動化への抵抗

星山 健

ISBN978-4-909658-42-5 C0095
A5判・上製・カバー装・240頁
定価：本体6,000円（税別）

先人の業績に寄りかかり、無批判に継承することで、作品解釈が自動化することがなかったか、再検証を試みる書。

話型と中心人物の対応性、不評価巻の存在意義、物語擱筆後の展開の推定・推測、主人公の理想性保持の方法、歴史物語の分析方法、テーマを共有する歌・物語の分析方法について等、抱いた疑問に答え、単に従来の研究上の「常識」を疑うにとどまらず、各作品の本質を問おうとする。

【平安時代の物語が有する仕掛け・仕組み、それを本書では「王朝物語の表現機構」と呼ぶ。そして、長年の研究の蓄積により自明視されている問題、あるいは、記念碑的論者が現れたことによりすでに決着済みと見なされている問題について、別の見取り図はあり得ないか、まったく逆の捉え方も成立し得るのではないかと問い直すことが、本書の基本的態度である。これまで、先人の業績に寄りかかり、それを無批判に継承することにより、作品解釈が自動化することがなかったか、再検証を試みた次第である。】
…「序章」より

【目次】

凡例

序章

第I部 『落窪物語』論―男君を中心に継子物語を読む―

第一章 男君が継子を幸福にする物語

第二章 脇役達の登場意義と役割

第三章 重んじられる「心」

第II部 『源氏物語』論―不評巻の再評価と物語の行方―

第一章 「朝顔」巻論―女三宮物語の伏線として―

第二章 「蜻蛉」巻後半の薫像―肥大化する対句宮意識―

第三章 「蜻蛉」巻、明石中宮への侍従出仕の意義―「夢浮橋」巻の先に見える救いなき世界―

第III部 後期物語論―〈引用〉という視点からの再考察―

第一章 『浜松中納言物語』、唐后転生を待つもの

第二章 まことの契り・まことならぬ契り―『今とりかへばや』における『浜松中納言物語』引用―

第IV部 『栄花物語』論―〈資料参照読み〉から離れて―

第一章 『栄花物語』正編研究序説―想定読者という視座―

第二章 「さまざまのよろこび」巻論―帝後宮の物語から兼家一家の物語へ―

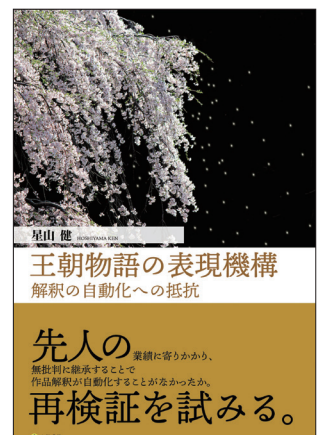
第三章 「みはてぬゆめ」巻の構造―不敬事件へと収斂する物語―

第四章 後宮運営に関わる者の系譜上における道長

附 菟原処女伝説の諸相―〈影響関係〉という呪縛からの解放―

初出一覧

索引



古典の未来学

Projecting Classicism

荒木浩編

ISBN978-4-909658-39-5 C0095

A5判・並製・872頁

定価：本体 8,000円（税別）



古典研究にとって、いまは決定的なピンチか、千載一遇のチャンスか。古典研究の方向や古典性のありかを広く考察し、新しい古典学を提示しようとする書。全44名により、古典研究が近未来の人文学に提示すべき、学際的な意味や国際的可能性を追究した、刺激的で多角的な論集。いま誰が何を考え前に進んでいるのか。古典研究の最前線から今後の可能性を問いかけ広げようとする、ヒント満載の書です。

【目次】序論 〈投企する古典性—Projecting Classicism〉から「古典の未来学」へ [荒木浩] / I 投企する古典性 / 第1部 古典を見せる / 古典を生きる / 1-1 古典を見せる—展示という方法 / 第1章 女子大で古典を展示すること—実践報告とそれに基づく若干の考察 [中前正志] / 第2章 美術で楽しむ古典文学—「徒然草」展の事例報告 [上野友愛] / 文化をつなげる場としての展覧会—ロンドン大学 SOAS 大英博物館の国際共同研究プロジェクトを事例として [石上阿希] / 1-2 古典を生きる—韻文の創作とその展開 / 第3章 即興と記憶—中世和歌連歌における「擬作」「本歌」「寄合」をめぐる [土田耕督] / 第4章 琉球における和歌の受容と展開 [屋良健一郎] / 第5章 世紀転換期日本および西洋における俳句の詩的可能性の拡大—出版、翻訳、再評価 [前島志保] / 第6章 教科書から実践的な俳句学まで [グエン・ヴー・クイン・ニュー] / 時をかける和歌—おみくじと占い [平野多恵] / 第2部 投企する古典性 / 古典との往還 / 第7章 身を投げる / 子を投げる—孝と捨身の投企性をめぐって [荒木浩] / 第8章 透明な声、隔たりの消失—古典世界において〈一つ〉の世界はいかに想像されたか [山藤夏郎] / 第9章 古代からの道行き—『行人』 [野網摩利子] / 第10章 『豊饒の海』縁起絵—『浜松中納言物語』、夢と転生、そして唯識思想 [河東仁] / 第11章 北京人文学研究所の蔵書から考える「投企する古典性」 [河野貴美子] / 出版社

の立ち上げと、これから [岡田圭介] / 第3部 古典を問う / 古典を学ぶ / 第12章 「投企」のカタチ—教室の「古典」 [竹村信治] / 第13章 未来に活かす古典—「古典は本当に必要なか」論争の総括と展望 [飯倉洋一] / 第14章 古典を必修にするために [渡部泰明] / 第15章 くずし字を知ること—日本古典文学の基礎学を考える [渡辺麻里子] / 古典との出会い方 [中野貴文] / 宣伝される大衆僉議—中世—後論の再構築 [呉座勇一] / 第4部 古典を観る / 古典を描く / 第16章 筍と土蜘蛛—古典がジャンルを越えるとき [山本陽子] / 第17章 頼光の杖—混沌にして豊穡な絵巻模写の世界へ [楊曉捷] / 第18章 語り物文芸の視覚化—説教源氏節の性格と意義 [深谷大] / 第19章 故事を遊ぶ—「戯画図巻」という文芸 [齋藤真麻理] / 第20章 風景を捉える川合玉堂の眼差し—大衆性と同時代性と [三戸信恵] / 第21章 洋画家・岸田劉生の初期の制作にみる古典性の投企—美術の複製メディアを手がかりに [前川志織] / 第22章 柳田國男『遠野物語』の「戦争物語」への変奏—村野鐵太郎監督の映画『遠野物語』を中心に [金容儀] / 第5部 古典を展（ひら）く / 古典を翻す / 第23章 「日本文学史」の今後—〇〇年—『日本「文」学史』から見通す [ヴィーブケ・デーネーケ×河野貴美子] / 投げ出された言葉を繋ぎ止めるために—翻訳の準備的作業としての「概念史」 [河野至恩] / 第24章 投企された「英訳方丈記」—夏目漱石の「作家論」から「天才論」へ [ゴウランガ・チャラン・プラダン] / 第25章 古典の翻訳—大衆性と視覚性を問う [李愛淑] / Column 7 投企する文学遺産—有形と無形を再考して [エドアルド・ジェルリーニ] / 第6部 古典と神話 / 古典と宗教 / 第26章 古事記の〈天皇像〉—「詔」の分析をとおして [アンダソヴァ・マルル] / 第27章 一三世紀の失敗した宗教議論—『広疑端決集』の政治議論を中心に [ダニエル・シュライ] / II 特論—プロジェクト・プロジェクト / 第1部 「投企する太平記—歴史・物語・思想」から / 第1章 点描 西源院本『太平記』の歴史—古写本から文庫本まで [和田琢磨] / 第2章 「太平記史観」をとらえる [谷口雄太] / 第3章 『太平記』に見る中国故事の引用 [亀田俊和] / 第4章 『太平記』の近世的派生 / 転生—後醍醐・楠像を軸に [井上泰至] / 第5章 以津真天の変容—〈創作的解説〉の時代を中心に [伊藤慎吾] / 第2部 「日本漢文学プロジェクト」から / 第6章 「和漢」型の漢詩詞華集の流行と近代日本における古典の教養—結城蕃堂『和漢名詩鈔』と簡野道明『和漢名詩類選評釈』 [合山林太郎] / 第7章 元号「令和」—時間の表象と政治の隠喩 [葛継勇] / III Projecting Classicism in Various Languages / Chapter 1 "Distance Reading, Migration of the meaning and Metempsychosis through Translation: Is "World Literature or Global Art" Possible? — Comparative Literature and Art in the Context of the Globalization —" [稲賀繁美] / Chapter 2 "Projecting Classicism in Classical Kabuki Theatre — A Gender Perspective" [ガリア・ペトコヴァ]

二十四節気で読みとく漢詩

古川末喜

ISBN978-4-909658-37-1 C0098

A5判・並製・448頁

定価：本体 2,800円（税別）

中国の古典詩は、季節をどのように詠っているか。詩に詠われた真の季節を探り、制作年代をも明らかにする。

二十四節気は、簡単に言うと、一年間の太陽の動き、すなわち季節の推移を二十四等分した枠組みである。旧暦すなわち太陰太陽暦にとって、不可欠の要素として、二千年以上の長きにわたって、農業や暮らしの文化に深く関与してきた。

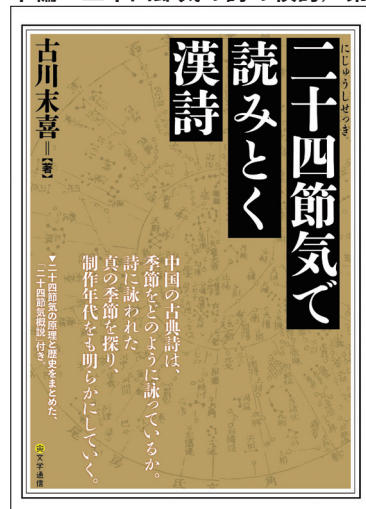
本書はその枠組みから、その詩がその節気である根拠をいちいち検討し、作者が何歳のとき、どこで作ったかを、可能なかぎり明らかにする。

序編として、中国で二十四節気という発想が、どのように生じ発展していったかを、概論的にまとめた「二十四節気概説」を付す。この序論を読めば、年代特定については、中国の古典詩以外の分野でも用いることができるし、中国以外でも二十四節気の日付を残す文献がある国では、活用の参考になる。

【わたしはもともと中国の古典詩が、季節をどのように詠っているかを知りたかった。ただ、旧暦の日付で見ていると、今述べたように、詩に詠われた真の季節はわからない。そのとき、旧暦の中に二十四節気という太陽暦が組み込んであること、そして二十四

節気を基準に見れば、その詩が詠う季節がどの時期にあるのか、客観的にわかることに気づいた。季節の推移は、太陽の黄道上での（つまり地球の公転軌道上での）動き、位置によって決まり、一年を二十四等分する二十四節気が、季節の推移を客観的に知ること、きわめて便利であることに気づいたのである。】…「序」より

【目次】 / 序 / 凡例 / 序編 二十四節気概説 / 第1節 二十四節気の原理 / 第2節 二十四節気成立前史 / 第3節 二十四節気の確立、および充実期 / 第4節 陰陽暦の中の二十四節気 / 第5節 二十四節気と太陽エネルギー / 本編 二十四節気の詩の検討 / 第1章 春 / 第1節 孟春の詩 / 第2節 仲春の詩 / 第3節 季春の詩 / 第2章 夏 / 第1節 孟夏の詩 / 第2節 仲夏の詩 / 第3節 季夏の詩 / 第3章 秋 / 第1節 孟秋の詩 / 第2節 仲秋の詩 / 第3節 季秋の詩 / 第4章 冬 / 第1節 孟冬の詩 / 第2節 仲冬の詩 / 第3節 季冬の詩 / あとがき / 索引 ○二十四節気関連事項索引 / ○人名索引 / ○書名・篇名・ソフト名・サイト名索引 / ○地名索引



説話文学研究の最前線

説話文学学会 55 周年記念・北京特別大会の記録

説話文学会編

ISBN978-4-909658-35-7 C0095

A5 判・並製・368 頁

定価：本体 3,000 円（税別）



2018 年 11 月 3 日～5 日の 3 日間、北京の中国人民大学（崇徳楼）で開催された説話文学学会五十五周年記念・北京特別大会の報告集。近年著しく進展している東アジア仏教を主とする宗教研究を視野に入れつつ、第一部には、中国仏教に焦点を当てた講演とシンポジウムに加え、『釈氏源流』を事例とするラウンドテーブル、さらなる問題展開として〈環境文学〉を軸に東アジアの宗教言説と説話をめぐるラウンドテーブルを行った学会の様子を完全収録。第 2 部は「これからの説話文学研究のために」として、今後の研究への提言として、内外の研究者 10 名による文章を収録した。

【目次】

序「中国仏教と説話文学」の沃野へ＝小峯和明／**第 1 部 説話文学研究の最前線—説話文学学会 55 周年記念・北京特別大会の記録**／開会の辞＝李 銘敬／基調講演「中国仏教と説話文学」／1 朝鮮翻刻明伊王府刊『釈迦仏十地修行記』の金牛太子説話について＝金文京／2 仏教説話としての擬経＝石井公成／3 唐宋代の往生伝の編纂と伝承—遼非濁撰『新編随願往生集』研究序説＝李 銘敬／**シンポジウム「中国仏教と説話文学」**／1 上代文学の文体と漢訳仏典の比較研究—時空表現を中心に＝馬 駿／2 『夢中間答』の説話学—東アジアにおける靈性の波動＝小川豊生／3

説話の創造—淵源としての東アジア、東大寺草創「四聖」観の生成過程＝小島裕子／4 李白作「誌公画讚」成立時期の検討—南京・靈谷寺「三絶碑」成立説話を手掛かりに＝野村卓美／5 コメントーターより①渡辺麻里子 ②陸 晚霞 ③吉原浩人／**ラウンドテーブル 1「釈氏源流を読む」**／1 『釈氏源流』の伝本をめぐる＝小峯和明／2 『釈氏源流』（仏伝部）の典拠について＝周 以量／3 儒教説話「以豆自検」の源流考—「稷多籌算」を読む＝何 衛紅／**ラウンドテーブル 2「東アジアの〈環境文学〉と宗教・言説・説話」**／1 東アジアの時間から見た〈環境文学〉—「鼠の嫁入り」の時間問題＝劉 曉峰／2 東アジアの〈性〉と〈環境文学〉—熊楠・男色・遊郭・二次的自然＝染谷智幸／3 東アジア／日本における自然誌叙述と国家史叙述＝樋口大祐／4 菩提樹の伝来—栄西による将来とその意義＝米田真理子／5 韓国の野談と〈環境文学〉＝金 英順／6 ベトナムの説話と〈環境文学〉—研究事情と課題＝グエン・ティ・オワイン／閉会の辞＝近本謙介／**第 2 部 これからの説話文学研究のために**／日本文化史と説話研究—戦後歴史学が失ったもの＝井上 亘／説話の背後に広がるもの—説話が機能するためには＝水口幹記／文学に内包された絵画、あるいはテキストの図像学＝山本聡美／鑑真伝記の変容と説話＝丁 莉／医事説話と〈学説寓言〉＝福田安典／見える呪術とみえない占い—説話の故事性を考える＝マティアス・ハイエク／説話研究の地域貢献—「月の兎」説話と地名伝承＝趙 恩鶴／ベトナムの説話世界の独自性と多元性—東アジア世界論・単一民族国家論・ナショナリズムを超えて＝ファム・レ・フィ／デジタル時代の研究環境への一提言＝楊 曉捷／説話文学学会 55 周年に思う＝千本英史／**付録 北京所在の遼代の寺院をめぐる—旅のしおり**＝栗野友絵／1 龍泉寺（りゅうせんじ）／2 大覚寺（だいかくじ）／3 潭柘寺（たんしゃじ）／4 天寧寺（てんねいじ）／あとがき＝小峯和明

虚学のすすめ

基礎学の言い分

白石良夫

ISBN978-4-909658-49-4 C0095

四六判・並製・カバー装・208 頁

定価：本体 1,900 円（税別）

学問は即効薬ではない。即効薬ではないが、それなくして即効薬はつくれない。

学問が役に立つとはどういうことか。学者のあり方とは。研究のおもしろさとは何か。元国語科教科書調査官の著者がつづったエッセイ集。「第 1 部 むなしい学問なのか」「第 2 部 文学青年から文学研究者へ」「第 3 部 国文学ひとりごと」でつたえる、学問のススム。

【学問には、その成果が見えるようになるまでに長い時間を要する分野がある。そのような長い時間がたつと、成果が見えるようになって、社会と学問との接点はどうしても見えづらい。当の研究者でさえ、往々にしてその接点を捜しあぐねている。しかし、繰り返して言うが、学問は即効薬ではない。即効薬ではないが、それなくして即効薬はつくれない。

成果結果のあらわれるまでに長い時間を要し、社会との接点が理解されにくい学問、それが「虚学」であり、文学部はその「虚学」の巣窟である。】…本書「虚学の論理」より

【目次】

まえがき

第 1 部 むなしい学問なのか

虚学の論理

ノーベル賞と旧石器

「勇気をもて。学者の良心を忘れたのか」

共和国は学者を必要としていない

人文学のプリンシプルを忘れるな

大学図書館は本を貸し出すな

第 2 部 文学青年から文学研究者へ

文学部への道

文芸部部室と無邪気な夢

中野三敏先生と和本修業

今井源衛先生と『学海日録』

刊行始末

非の打ち所のない先行研究の

功罪

第 3 部 国文学ひとりごと

作者は本当のことを書かない

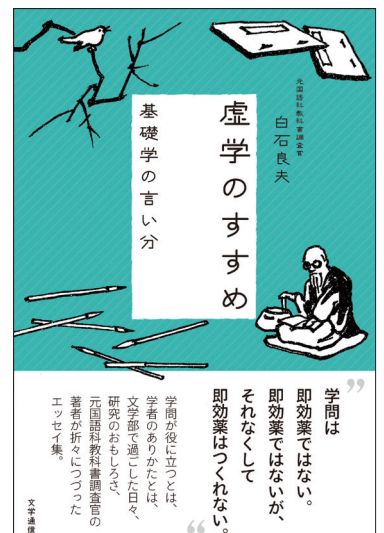
二人のタケウチ氏をめぐる因

縁譚

資料を読み解く面白さ

語る〈時間〉、語られる〈時間〉

資料の提供か、成果の発信か



学問は即効薬ではない。即効薬ではないが、それなくして即効薬はつくれない。

学問が役に立つとは、学者のありかたは、文学部で過ごした日々、研究のおもしろさ、元国語科教科書調査官の著者が折々につづったエッセイ集。

信長徹底解読

ここまでわかった本当の姿

堀 新・井上泰至編

ISBN978-4-909658-31-9 C0021

A5判・並製・400頁

定価：本体2,700円（税別）

信長はいかに記録されてきたのか、彼の姿はフィクションでどのように描かれてきたのか。どこまでが実像で、どこまでが虚像なのか。その若き日々から本能寺の変にいたるまで、居城や天皇・女性との関わりなど、多岐にわたるトピックを立てて包括的に論じます。

本書は日本の歴史史上もっとも知られた戦国武将に、歴史学と文学の両分野からアプローチし、それぞれ最新の研究動向をふまえ論じ尽くします。

織田信長の虚像と実像を徹底的に暴き、研究の最前線を一冊にまとめた書。

- ・桶狭間の戦いは、奇襲ではなく偶然の勝利だった！
- ・「人間五十年」と信長が舞ったのは、能の「敦盛」ではない！
- ・「麒麟」の花押に込められた信長のねらいとは何か？
- ・帰蝶（濃姫）を活躍させた犯人は司馬遼太郎である！
- ・明智光秀ほど演劇の題材となる武将はいなかった！

これから信長について知りたい人、これまで抱いていた信長像をアップデートしたい人にとって必携の一冊。

【目次】

本書の読み方・概要紹介・織田信長略年譜／序 歴史と文学の共

謀一五十五年の夢、五十年の夢（井上泰至・堀 新）／1章 若き日の信長と織田一族〔実像編〕谷口克広〔虚像編〕湯浅佳子／コラム 太田牛一と信長公記（堀 新）／2章 今川義元と桶狭間の戦い〔実像編〕堀 新〔虚像編〕湯浅佳子／3章 美濃攻め〔実像編〕土山公仁〔虚像編〕丸井貴史／4章 堺と茶の湯〔実像編〕吉田 豊〔虚像編〕石塚 修／5章 信長と室町幕府〔実像編〕水野 嶺〔虚像編〕菊池庸介／コラム 信長とフロイス（桐野作人）／6章 元亀の争乱〔実像編〕桐野作人〔虚像編〕井上泰至／7章 本願寺と一向一揆〔実像編〕大澤研一〔虚像編〕塩谷菊美／8章 長篠の戦い〔実像編〕金子 拓〔虚像編〕柳沢昌紀／コラム 長篠合戦図屏風（金子 拓）／9章 中国攻め（摂津播磨を含む）〔実像編〕天野忠幸〔虚像編〕菊池庸介／10章 信長の城〔実像編〕松下 浩〔虚像編〕森 暁子／コラム 洛中洛外図屏風と安土図屏風（堀 新）／11章 信長と女性〔実像編〕桐野作人〔虚像編〕網野可苗／12章 信長と天皇・朝廷〔実像編〕堀 新〔虚像編〕井上泰至／13章 武田攻め（長篠以降）〔実像編〕柴辻俊六〔虚像編〕森 暁子／14章 明智光秀と本能寺の変〔実像編〕福島克彦〔虚像編〕原田真澄／コラム 信長の肖像画（堀 新）／○付録／信長関連作品目録（軍記・軍書・史書・実録・史論・図会・随筆・小説）（竹内洪介）／信長関連演劇作品初演年表（人形浄瑠璃・歌舞伎）（原田真澄）／



杞憂に終わる連句入門

鈴木千恵子

ISBN978-4-909658-32-6 C0095

A5判変形・並製・152頁

定価：本体1,500円（税別）

おそらく世の中には、過ぎてみれば杞憂であったということは転がっている。連句の実作もその一つではないだろうか――。

「敷居が高いのではないか、式目が難しいのではないか。でも、私の飛び込んだ連句の世界は、魅力に満ち溢れていた。書物を読んだだけではわからない、実作の場はとても刺激的だった」。

本書はそんな連句の魅力を、エッセイと連句作品から伝えていく。冒頭に「本書を読むまえに一連句のきほん」を掲載。実作を試みようと思っているすべての人に。

【目次】

はじめに

本書を読むまえに一連句のきほん用語

I 連句に関する覚書

「面八句を庵の柱に懸置」考／与奪とは何か／あいさつ／「灯の花」と「盃の光」／神祇・釈教・恋・無常／歌舞伎と俳諧

II 連句作品

第一章 連句に挑戦

梅が香に一総合芸術としての連句／歌仙「梅が香に」（脇起り）／留書「梅が香に」文音ウ「梅が香に」文音ナオ「梅が香に」文音

ナウ

第二章 連句作品

歌仙「初捌き」／半歌仙「満開の花」／歌仙「淡雪の」／歌仙「新緑を」／源心「雪しぐれ」／半歌仙「ゴッホの糸杉」／歌仙「一文字ぐるぐる」／歌仙「臍より花」／半歌仙「松林図」／歌仙「西鶴のとりもつ縁」 二村文人捌／歌仙「碑林礎石」／歌仙「初湯」 杉本聰捌／二十韻「冬晴れや」 二村文人捌／歌仙「美祿」／歌仙「蜜豆食ふ」 奥野美友紀捌／歌仙「春の雲」（脇起り）／短歌行「大瀑布」／歌仙「葡萄かな」（脇起り）／歌仙「朝顔や」（脇起り）／二十韻「石清水」／二十韻「青時雨」／短歌行「織月の雫」／二十韻「鳥雲に」 杉本聰捌

第三章 「老が恋」（脇起り）解説付き

歌仙「老が恋」（脇起り）／「老が恋」解説

III エッセイ

西鶴と高校教師／関口芭蕉庵時代のことなど／遊び心の句／静司さんと二村さん／天使揺れ居る／私の宝物／「明雅先生の古典籍」幻視／「あがたの森」幻視／夢想

初出一覧



過ぎてみれば杞憂であったということは転がっている。連句の実作もその一つではないだろうか。

用紙の一つの作品を制作する連句。その完成に一歩足を踏むために。

読書の歴史を問う

書物と読者の近代 改訂増補版

和田敦彦

ISBN978-4-909658-34-0 C0000

A5判・並製・328頁

定価：本体1,900円（税別）

私たちは、読書を自分一人で行う孤独で内面的な営みだと思いがちだが、読書は一人では決して成り立たない。

では読書とはどのようなものなのだろうか。そこにはどんな問いが隠れているのか。本書はそんな多様な問いを調べ、考えていくための実践的なマニュアルである。

文学×教育学×歴史学、出版×流通×販売、など諸学が交差する「読書の歴史」という地点で、何をどう調べ、学ばばいいのか。学び、調べることの豊かな可能性や広がりや存分に伝える名著の改訂増補版（40ページ増えました）、遂に刊行！

【読書は、それぞれの時代、場所で同じような行為、経験としてあったわけではない。また、書物と読者の間だけでなりたつ孤立した行為でもない。この当たり前のことが、読書を学び、調べることの豊かな可能性や広がりを作り出す。ある時期や地域の読者を問うたり、あるいは書物を作り、運び、紹介したり、保存したりする行為を研究したり、学んだりすることに結びついていく。本書は、こうした読書の歴史に関わる多様な問いを調べ、考えるための実践的なマニュアルのようなものだ。】…「おわりに」より

【目次】

はじめに なぜ読書を問うのか

第1章 読書を調べる

第2章 表現の中の読者

第3章 読書の場所の歴史学

第4章 書物と読者をつなぐもの

第5章 書物が読者に届くまで

第6章 書物の流れをさえざる

第7章 書物の来歴

第8章 電子メディアと読者

第9章 読書と教育

第10章 文学研究と読書

おわりに あとがきにかえて

注 人名索引 事項索引



城壁

榛葉英治

解説・和田敦彦（早稲田大学教授）

ISBN978-4-909658-30-2 C0095

四六判・並製・296頁

定価：本体2,400円（税別）

市内に、敵の一兵たりとも、残存するを許さず。城内にある敵兵を、徹底的に粛清せよ。以上が命令である――。

『城壁』は、南京大虐殺事件を複数の視点から描き出したばかりではなく、それをいかに歴史として残していくかを問うた最初の小説として、記憶されなくてはならない――。

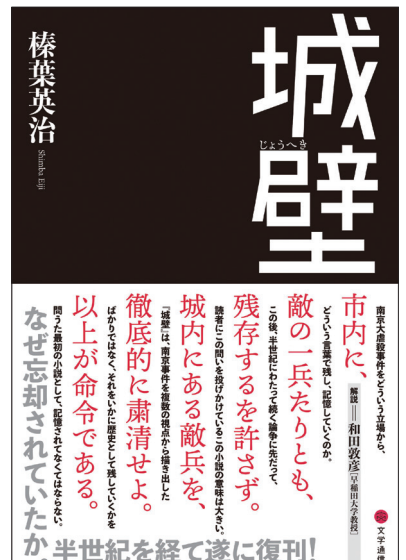
南京事件を正面からとりあげた唯一の長編小説といってもよい本書を、忘却の彼方から引きずり出す。南京事件をどういう立場から、どういう言葉で残し、記憶していくのか。1964年に河出書房新社から刊行された、直木賞作家が描いた問題作『城壁』を、いま、新たに光をあてるべく、半世紀を経て遂に復刊。解説・和田敦彦（早稲田大学教授）。

【彼は考えていた。歴史というものにたいする疑惑だ。同時に、不信でもある。この南京占領は、歴史にどう書かれるだろう？ここで日本軍隊が何をやったかということ、国民も、後世の人も知らずにすぎるだろうか？（99頁）】

【著者紹介】

榛葉英治（しんば・えいじ）

1912年、静岡県掛川町生まれ。1936年、早稲田大学文学部英文科を卒業、旧満州（現中国東北部）に渡り、1937年、関東軍の大連憲兵隊に英語通訳として勤務。1939年、満州国外交部に職を得る。1945年召集され、満州で終戦を迎える。1946年、日本に引揚げ。帰国後、「渦」（『文芸』1948年12月）や「蔵王」（同、1949年3月）の作で注目される。1958年、『赤い雪』（和同出版社）で第39回直木賞を受賞。同年刊行の『乾いた湖』は映画化（篠田正浩監督、松竹、1960年）されている。自身の引揚げ、抑留体験をもとにした『極限からの脱出』（読売新聞社、1971年）、『満州国崩壊の日』（上、下、評伝社、1982年）や、『大いなる落日』（時事通信社、1974年）にはじまる歴史物の他、純文学から大衆向けの小説、エッセイまで幅広く執筆。釣りについてのエッセイやルポルタージュの草分けでもあり、『釣魚礼賛』（東京書房、1971年）は版をかえて長く読みつがれた。1993年、自伝『八十年現身の記』（新潮社）を刊行。1999年、死去、86歳。



古典教育と古典文学研究を架橋する

国語科教員の古文教材化の手順

井浪真吾

ISBN978-4-909658-26-5 C1037

A5判・並製・344頁

定価：本体2,700円（税別）

古文テキストの教材化は、こうして行う。

古典教育研究、古典文学研究の架橋を試み、生徒たちの古典教育を考える。

「古典を勉強する意味ってあるんですか？」近年、こういった問いに対して応答する人が増えてきました。

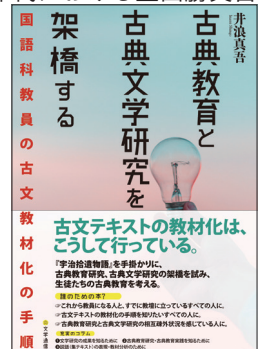
しかしその問いについて、古典文学研究者からの提言は「生徒の古典嫌い」をどう打開していくかに議論が集中し、教科書教材の面白い読み方、教科書に採録されていない古文テキストの紹介など、古典世界へのアプローチばかりが言い立てられています。ここでは「古典世界の奥深さ」「古典文学の魅力」など、古文テキストの価値は先験的に認められており、学習の意義との回路が明示されることはありません。

古典文学研究者にとって古典教育の世界は、授業作り提案と実践報告、学習指導要領解説で埋め尽くされている、研究者が踏み込めない世界と映り、教員は時間的な余裕もなく、古典文学研究の細分化や領域拡張もあり、自らとの間に切実さが見えないものと映ってしまっています。では互いの相互疎外状況を変えていくにはどうすればいいのか。

本書は、古典文学研究が明らかにしてきたものを生かし、古典教育研究や古典教育実践が明らかにしてきた古典教育の意義や目標と照合し、現在の古典教育をめぐる状況を踏まえながら、『宇治拾遺物語』を手掛かりに、教材化を試みた実践の書です。

【目次】

序章 古典教育の課題／**第一部 教材分析の方法**—『宇治拾遺物語』の表現とその位相を考える／第一章 最新研究の調べ方—説話研究と『宇治拾遺物語』研究の現在／第二章 先行研究の調べ方—『宇治拾遺物語』の表現はどう分析されてきたか／コラム1 文学研究の成果を知るために／第三章 表現を分析する—『宇治拾遺物語』の表現の実際／第四章 言語場を分析する—『宇治拾遺物語』が営まれた空間／**第二部 教材化の前に考えておきたいこと**—**古典教育の目標と古典教材を考え直す**／第一章 中等教育における国語教科書の中の古典教材の現状—説話教材を中心に／第二章 国語教育誌の中の〈古典〉の現状—国語教室で創られる〈古典〉／コラム2 古典教育研究・古典教育実践を知るために／第三章 公共性・主体・古典教育—50年代における益田勝実古典教育論／第四章 公共性・言説の資源・古典教育—60年代における益田勝実古典教育論／**第三部 教材化の構想**—『宇治拾遺物語』を例に／第一章 国語教室の『宇治拾遺物語』／第二章 『宇治拾遺物語』の教材化にむけて／第三章 『宇治拾遺物語』の教材化案／コラム3 説話（集テキスト）の表現・教材分析のために／参考引用文献 あとがき 索引（書名・人名・事項）



好古趣味の歴史

江戸東京からたどる

法政大学江戸東京研究センター・小林ふみ子・中丸宣明編

ISBN978-4-909658-29-6 C0095

A5判・並製・272頁

定価：本体2,800円（税別）

人はなぜ過去の記録を調べ、探し、記録するのか。

江戸の人たちは、地名や風俗、慣習、年中行事まで、往事の事物を探究し、ひと昔前の江戸の土地と暮らしのすがたを克明に調べあげ、書き残した。それは何のためか。なぜ人はいにしえのものに惹かれてしまうのか。

アイデンティティの確認として、作品世界の羅針盤として、新たな創作の起源として、過去の記憶は人々の生活に息づくようになるのである。

江戸、そして東京から好古の営みの歴史を繙いていく書。

【目次】

はじめに●小林ふみ子

（I 知識を集め地理をひもとく）

Chapter1 江戸の歴史のたどり方—考証の先達、瀬名貞雄・大久保忠寄と大田南畝●小林ふみ子

Chapter2 「長禄江戸図」と馬琴の地理考証—「神宮」をめぐる混乱●神田正行

Column 江戸回顧の時代と文学者の地誌—幸田露伴「水の東京」の試み●出口智之

Chapter3 鷗外歴史文学の〈江戸〉像—時間・空間の語りかたに注目して●大塚美保

（II 風俗や慣習の由来を探る）

Chapter4 新興都市江戸の事物起源辞典—菊岡涼京『本朝世事談綺』考●真島望

Chapter5 七兵衛という飴売り—柳亭種彦の考証随筆『還魂紙料』●佐藤悟

Chapter6 失われた端午の節句「印地打」—日本人と朝鮮人のまなざしから考証する●金美眞

Column 風俗を記録する意図—雑芸能者たちの〈江戸〉●小林ふみ子

（III 盛時の歌舞伎と遊里の面影を求めて）

Chapter7 古画を模す—京伝の草双紙と元禄歌舞伎●有澤知世

Chapter8 古画の収集と考証—京伝読本の発想源●阿美古理恵

Column 其角の記憶・追憶・江戸残照●稲葉有祐

（IV 響き続ける江戸）

Chapter9 受け継がれた江戸—高島藍泉の考証随筆●中丸宣明

Chapter10 「趣味」(Taste) とは何か—近代の「好古」●多田蔵人

Column 趣味を持ちにくい町●多田蔵人

Chapter11 江戸漢詩の名所詠と永井荷風●合山林太郎

Chapter12 江戸をつくりあげた石川淳●関口雄士

あとがき●中丸宣明

好古趣味人必見！ 江戸を知る文献

22点●小林ふみ子

執筆者一覧



江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽

前島美保

ISBN978-4-909658-25-8 C0070
A5判・上製・カバー装・624頁
定価：本体12,000円（税別）

どのような人物が、どのような演奏を行っていたのか。上方と江戸の体系的な歌舞伎音楽史を把握し、日本音楽史、近世文化史を考え直すために。

江戸歌舞伎のみ注目され歌舞伎音楽研究が進められてきた結果、上方を含めた近世歌舞伎音楽や演奏家の通史的な研究、あるいは上方に特化した歌舞伎音楽史や舞踊史は現在まで行われてこなかった。

そこで本書は、江戸時代の上方歌舞伎を支えた囃子方（唄、三味線、鳴物の演奏者）の芝居小屋出勤とその上演演目について各種の演劇書（興行関係史料）から把握し、囃子方の関わった音楽や舞踊の実態を史料に基づき明らかにする。対象は十八世紀（江戸中期）、天和期から天明期まで（一六八一～一七八八）である。

漠然と捉えられていた時代の上方歌舞伎の音楽を明らかにしただけでなく、上方歌舞伎の囃子方とその音楽に焦点を当てることで、中世から近世へという芸能の過渡期的な様相や、上方・江戸の文化交流・発信の諸相など、時代のダイナミズムを具体的に見定めることが可能になることをも示した画期的労作。

資料「江戸中期上方歌舞伎囃子方一覧（天和～寛政）」「江戸後期上方歌舞伎囃子方一覧（顔見世番付、役者評判記）（享和～慶応）」付き。

【目次】

はじめに／本書凡例／序論／第一部 囃子方の変遷／第一章 寛延以前の囃子方／第一節 囃子方概観／第二節 囃子方をとりまく環境とその性格／第三節 囃子方の東西交流とその影響／第二章 宝暦以降の囃子方／第一節 囃子方概観／第二節 囃子方をとりまく環境とその性格／第三節 囃子方の東西交流とその影響／第二部 音楽の変遷／第一章 芝居に関わる音楽演出／第一節 『落葉集』と絵入狂言本にみる芝居歌一元禄期上方歌舞伎の調子選択／第二節 上方歌舞伎の囃子名目とその用法—『歌舞伎台帳集成』および劇書を手がかりに—／第二章 舞踊・所作事の展開／第一節 上方の脇狂言／第二節 都風流大踊の所演状況／第三節 大切所作事考—詞章にみる江戸との関わり—／【翻刻一】安永八年三月大坂角の芝居「鐘恨重振袖」（正本）／【翻刻二】天明五年正月大坂中の芝居「七変化七艸拍子」（台帳）（部分）／【翻刻三】天明五年四月大坂中の芝居「恋闇卯月の楓葉」（絵尽し）／【翻刻四】天明七年九月大坂大西芝居「梅紅葉浪花丹前」（正本）／結論／資料一 江戸中期上方歌舞伎囃子方一覧（天和～寛政）／資料二 江戸後期上方歌舞伎囃子方一覧（顔見世番付、役者評判記）（享和～慶応）／付論 東西歌舞伎における小歌と長唄呼称の推移—顔見世番付にみる地域差—／初出一覧 あとがき 索引（書名・人名）



近世前期江戸出版文化史

速水香織

第42回日本出版学会賞（2020年度）奨励賞

ISBN978-4-909658-24-1 C0095
A5判・上製・カバー装・456頁
定価：本体8,800円（税別）

近世前期の江戸大衆文化を醸成した書肆たちと、そこから生み出された文化を探る。

三都（京・大坂・江戸）の出版界が互いに結びつきはじめる1670年代から、三都に本屋仲間が結成されて後、より組織的な活動が確立してゆく1750年代までの、江戸を中心とした出版文化の具体的な姿は、個々の書肆に関する資料が極めて乏しく、捉えきれていなかった。

そこで本書は、近世前期の江戸において大規模な出版活動を展開した書肆を複数選定し、その出版物を調査して年表化を行い、個々の出版活動の具体像を構築し直し、そこから地域としての特性や活動傾向を推測、書肆活動の文化史的な意義を明確にする。また商品として世に送り出された浮世草子を中心とする作品群と出版文化との係わりについても検討し、読者に受け容れられることを前提とした作品解釈をも試み、江戸前期の出版文化を立体的に提示した。付表として、近世前期に活動した「万屋清兵衛出版年表」を備える。

はじめて明らかになる、近世前期の江戸出版文化。

【目次】

はじめに—出版文化の発達とは、社会・文芸のあり方に、どのような変容をもたらしたのか—／第一編 近世前期における江戸出版

界の諸相／第一章 貞享・元禄期における三都の出版書肆—西鶴本板元を中心に—／第二章 元禄末年の江戸出版界—上方との係わりにおいて—／第三章 正徳・享保期における江戸出版界と上方浮世草子—『武徳鎌倉旧記』出版の背景—／資料1 江戸書肆の取引状況・資料2 須原屋茂兵衛の出版物（正徳三～享保十一）／第四章 中山道関連書籍の出版に見る三都本屋仲間の相克／第二編 文芸の創出と出版文化—物語の要素に映る社会—／第一章 近世前期文芸における大神宮と伊勢参宮／第二章 『好色五人女』巻二「情を入し樽屋物かたり」における「ぬけ参り」の意味／第三章 遊女となった息女—『武家義理物語』巻五の四「丸綿かづきて偽りの世渡り」の視点—／第三編 江戸書肆万屋清兵衛／第一章 開業時期の様相と出自／第二章 営業初期の出版活動／第三章 営業地と所付の問題／第四章 松葉貞倚—出版活動・執筆活動素描—／付表 万屋清兵衛出版年表／あとがき 初出一覧 索引（人名・書名）



怪異をつくる

日本近世怪異文化史

木場貴俊

ISBN978-4-909658-22-7 C0020
A5判・並製・カバー装・400頁
定価：本体 2,800円（税別）

怪異はつくられた!?

「つくる」をキーワードに、江戸時代を生きた人びとと怪異のかかわりを歴史学から解き明かす書。

人がいなければ、怪異は怪異にはならない。では誰が何を「あやしい」と認定して怪異になったのか。つまり、怪異はどうつくられてきたのか。そこにある様々なありさまを、当時の「知」の体系に照らし描ききる。章立ては、近世の怪異をつくった第一人者、林羅山からはじまり、政治、本草学、語彙、民衆の怪異認識、化物絵、ウブメ、河童、大坂、古賀侘庵の全10章プラス補論3章。

全方向から怪異のあり方を突き詰める、これからの怪異学入門が遂に誕生。

【ある物事を怪異だと認識するのは、人間です。たとえ石が宙に浮いた、山を越えるほどの大きな蛇がいた、夜の川辺で小豆を磨くような音がしたなどの出来事も、人がいなければ、人が認識しなければ怪異にはなりません。つまり、人がいて初めて怪異は成り立つのです。

こうした怪異に関わる人のいとなみを、本書では総じて「つくる」という言葉で表現してみたいと思います。

「つくる」といふのは、多種多様です。怪異だと認識することも、当然「つくる」といふのです。ある物事を誰がどのような理由で怪異だと決めたのか、その判断は、歴史性を帯びています。例えば、古代の律令国家では、国家つまり政権しか怪異の認定をすることができませんでした。もしも個人が勝手に「あれは怪異だ」と言いふらしてしまえば、その人は処罰を受けることが法で決められていたのです。誰（個人・共同体・国家など）がどのような理由で、特定の物事を怪異だと認識するのか、言い換えれば、誰が怪異を「つくる」のでしょうか。…「序章」より

【目次】序章 怪異をつくる

第一章 林羅山 近世の怪異をつくった第一人者

第二章 政治 政から見る怪異

補論一 フィクションとしての怪異 林羅山『本朝神社考』『僧正谷』を読み解く

第三章 本草学 モノとしての怪異

補論二 『日東本草図纂』『怪説』巻から個性を見る

第四章 語彙① 辞書に見る怪異

第五章 語彙② 言葉の用法と新しい解釈

第六章 民衆の怪異認識

第七章 化物絵 描かれる怪異

第八章 ウブメ 歴史的産物としての怪異

第九章 河童 人が怪異を記録するといふ

補論三 大坂 文化的な場と怪異

第十章 古賀侘庵 江戸後期の「怪異」をつくった儒者

終章 怪異を「つくる」ことから見えること

初出一覧 あとがき



江戸初期の香文化

香がつなぐ文化ネットワーク

堀口悟・鈴木健夫・村田真知子

ISBN978-4-909658-23-4 C0021
A5判・上製・カバー装
336頁＋口絵4頁
定価：本体 4,500円（税別）

公家と武家。それぞれはどう影響し合い、新しい文化を創りあげていったのか。香文化から江戸初期の文化伝播の様相を捉え直した書。

武家側から貴族に流入した香文化に関する情報は、香木の献上がほとんどであったが、本書の著者たちは、水戸市立博物館に伝わる『香道明鑑』によって、東国の武家、徳川頼房から京都の後水尾天皇に香道の「手引き書」が贈られたことをつきとめる。香木や他の香材料ばかりでなく、高度な香文化そのものが武家から公家へと贈られていたのだ。

従来「香文化は、宮廷貴族から武家や町人に伝わった」とする、一方向だけの伝来が考えられていたが、実はそうではないのではないか——。家康と香から解説をはじめ、貴族と武家の香文化を詳説、水戸藩初代頼房由来の貴重な香書、『聞香伝書』『香道明鑑』『聞香目録』『十炷香之記』を本文・訳・語釈で紹介。江戸初期の香がつないだ文化ネットワークの様相を浮かび上がらせる。

京と地方の文献比較に加えて、皇族や公家の遊び文化の中に「香会」を位置づけ、婚礼調度を代表とする香道具という新視点も取り入れることによって未開拓といってもよい江戸初期の香文化事

情を解明。謎解きのように読み進めるうちに、香文化への興味もわいてくる、エキサイティングな書。

【目次】

はじめに／第一章 江戸初期の香文化事情／一 徳川家康と香／

二 後水尾院文化圏と香文化—男性貴族と香／三 後水尾院文化

圏と香文化—女性貴族と香／四 東国武家の香文化／第二章 水

戸家の香書 概説／第三章 水戸家の香書 本文・訳・語釈／

一 『水戸市博本 香之記序』／二 『水戸市博本 古十組香』／

三 『水戸市博本 八組香』／四 『香道明鑑』／第四章 江戸初

期香文化のネットワーク／一 遊び文化と婚礼調度にみる香 [村

田真知子] / (1) 貝覆いと香一堂上の女性日記から / (2) 大名

婚礼調度の香道具 / 二 江戸初期の香文化の実相 [堀口悟] / (1)

男性貴族の香文化—『泰重卿

記』を中心に / (付) 男性貴族の香文化 香事表① / (2)

女性宮廷貴族の香文化—一品宮

の香事 / (付) 女性宮廷貴族の香文化 香事表② / 三 水

戸の香人、頼房と光圀 [鈴木健夫] / (1) 香道中興の祖頼

房とその後継者 / (2) 水戸光圀の香書献上と香事 / おわり

に 英文要旨 人名索引



薩琉軍記論

架空の琉球侵略物語はなぜ必要とされたのか

目黒将史

ISBN978-4-909658-20-3 C0095
A5判・上製・カバー装・784頁
定価：本体15,000円（税別）



未知なる国、異国「琉球」を侵略する、架空の軍記〈薩琉軍記〉。〈薩琉軍記〉とは、慶長十四年（一六〇九）の琉球侵攻を描いた軍記テキスト群である。実際には起きていない合戦を作りだし、様々な武将たちの活躍を創出した特異な軍記だ。本書はその〈薩琉軍記〉を研究する初の書である。

異国と戦った者たちの物語はなぜ必要とされたのか。異国合戦軍記が担った役割は何だったのか。その成立、諸本の展開構造、享受の実態から、明らかにしていく。国家の異国観が、大衆へ浸透していく様相を解明するべく、日本文学史に異国合戦軍記を位置づけようとする野心的な書。本書には、東アジアにおける日本の視座が問われている昨今、時代やジャンルを超越し取り組むべきテーマが凝縮されているといっても過言ではない。文学研究者のみならず、歴史、思想史にも有益な書である。

【目次】

序章 〈薩琉軍記〉研究の過去、現在／**第一部 〈薩琉軍記〉の基礎的研究**／**第一章 〈薩琉軍記〉諸本考**／第一節 諸本解題／付節 立教大学図書館蔵「〈薩琉軍記〉コレクション」について／第二節 薩琉軍記遡源考／第三節 物語展開と方法—人物描写を中心に—

／第四節 異国合戦描写の変遷をめぐって／第五節 系譜という物語—島津家由来譚をめぐって—／**第二章 〈薩琉軍記〉世界の考察—成立から伝来、物語内容まで—**／第一節 異国侵略を描く叙述形成の一齣—成立、伝来、享受をめぐって—／第二節 琉球侵略の歴史叙述—日本の対外意識と〈薩琉軍記〉—／第三節 描かれる琉球侵略—武将伝と侵攻の正当化—／第四節 偽書としての〈薩琉軍記〉—「首里之印」からみる伝本享受の一齣—／**第二部 〈薩琉軍記〉の創成と展開の諸相**／**第一章 物語生成を考える—近世の文芸、知識人との関わりから—**／第一節 近世期における三国志享受の様相／第二節 語り物の影響をさぐる—近松浄瑠璃との比較を中心に—／第三節 敷衍する歴史物語—異国合戦軍記の展開と生長—／第四節 歴史叙述の学問的伝承／第五節 蝦夷、琉球をめぐる異国合戦言説の展開と方法／第六節 予祝の物語を語る—〈予言文学〉としての歴史叙述—／**第二章 甦る武人伝承—再生する言説—**／第一節 渡琉者を巡る物語—渡海、漂流の織りなす言説の考察—／第二節 琉球言説にみる武人伝承の展開—為朝渡琉譚を例に—／第三節 語り継がれる百合若伝説—対外戦争と武人伝承の再生産—／第四節 為朝渡琉譚の行方—伊波普猷の言説を読む—／**終章—琉球から朝鮮・天草へ—異国合戦軍記への視座—**／資料篇／翻刻 1 立教大学図書館蔵『薩琉軍談』（A1・甲系⑤）解題と翻刻／2 国立公文書館蔵『薩琉軍鑑』（A3・③）解題と翻刻／3 刈谷市中央図書館村上文庫蔵『琉球征伐記』（A4・③）解題と翻刻／4 架蔵『琉球静謐記』（A5・⑧）解題と翻刻／5 架蔵『島津琉球合戦記』（B1・④）解題と翻刻／6 立教大学図書館蔵『琉球軍記』（B2・②）解題と翻刻／初出一覧 あとがき 索引（書名・人名・地名）

「国文学」の批判的考察

江戸のテキストから古典を考え直す

空井伸一

ISBN978-4-909658-27-2 C0095
A5判・上製・カバー装・468頁
定価：本体11,500円（税別）

優れた文学テキストは、作者の意図や同時代の共通理解をはみ出してしまうことで、ある種の普遍性に到達するのではないか——。今日私たちが「古典」とするものの多くは、書籍の公刊が可能とした知識の共有に因るところが大きいですが、本書は、日本近世期における文学受容の在り方として特徴的な、そういった公刊された作品を対象とし、特定の時代背景や限定的な人間関係だけに還元されることのない読みを通じて、「古典」が「開かれたテキスト」であることの意義について考える。

具体的上田秋成、井原西鶴、平賀源内という三人の作者について、その作品を取り上げ、作品論のかたちで個別に考察する。またそれを踏まえ、一国や一時代の文化や伝統を賛美し、それを規範と見なすような発想に対して批判的考察を加え、自文化中心主義や尚古主義、そして「国文学」なる学の問題についての検討も行う。

江戸のテキストから古典を考え直し、「国文学」を批判的に考察する書。

【目次】

はじめに 凡例／序 江戸のテキストを読むということ／**第一部**

秋成を読む／第1章 「白峯」に見る「和」—「隔生即忘」を強いる西行—／第2章 連帯する「孤独」—「菊花の約」の「友」—／第3章 「浅茅が宿」の「烈婦」—「玉」として砕ける宮木—／第4章 「夢応の鯉魚」の「遊戯」—「鮮」を厭う興義—／第5章 「芥子」の考察—「葵」から「蛇性の姪」「仏法僧」に及ぶ—／第6章 日本古典文学に見る死体描写の系譜—「青頭巾」「吉備津の釜」を中心として—／第7章 「青頭巾」の悟り—如来蔵としての「本源の心」—／第8章 「黄金」の語る貨幣—「貧福論」という「閑談」—／第9章 『諸道聴耳世間狙』試論——之巻一回・三之巻一回を中心に—／**第二部 西鶴を読む**／第1章 決定不可能性としての「不思議」—『西鶴諸国はなし』巻一の二「見せぬところは女大工」考—／第2章 境界上の独身者—『西鶴諸国はなし』巻四の七「鯉のちらし紋」考—／第3章 策彦の涙—『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」考—／第4章 左の腕を断つ話—『武家義理物語』巻六の二「表向きは夫婦の中垣」考—／**第三部 源内を読む**／第1章 宙吊りの地獄—『根南志具佐』の世界—／第2章 都市神話としての可能性—『根南志具佐』の「根」についての考察—／第3章 『風流志道軒伝』を読む—「空」と渡り合う貨幣の物語として—／第4章 『風流志道軒伝』の異空間—江戸への憧憬—／第5章 平賀源内と秋田鉞山開発／**第四部 「国文学」の批判的考察**／第1章 批判の学としての「国文学」／第2章 「無常」と「美」の日本的連関についての批判的考察／おわりに 初出一覧 索引（書名・人名）



注釈・考証・読解の方法

国語国文学的思考

白石良夫

ISBN978-4-909658-17-3 C0095

四六判・上製・288頁

定価：本体 3,200円（税別）

注釈していれば、知識は自然に増える。増えた知識は想像力を掻き立て、小難しい理論や七面倒な方法論にふりまわされなくて済む。

昔の人の古典読書を追体験するために、心掛けるべきは何か。後進に伝える古典読解の方法！

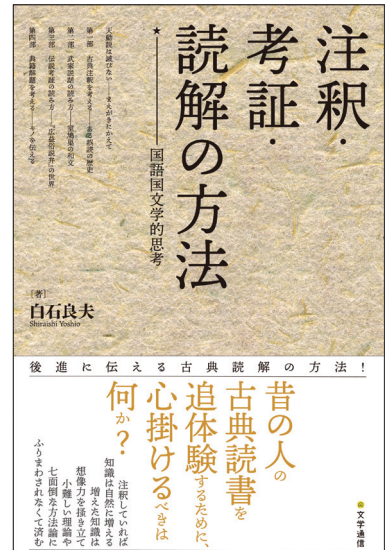
「後進に伝える研究方法」をコンセプトに、古典の注釈・考証・読解の方法を伝える。国語学と国文学、あるいは中古、近世、近代など、世間で勝手に作りあげられたジャンルや文学史の壁を遠慮せず乗り越え、古典を読み解くにはどうすればいいの。

先人に学びながら古典を読み解く術を、全四部「古典注釈を考える—ある誤読の歴史」「武家説話の読み方—室鳩巢の和文」「伝説考証の読み方—『広益俗説弁』の世界」「典籍解題を考える—モノを伝える」で伝えていく。対象とするものは、源氏、徒然、武家説話、考証随筆など幅広く、典籍解題の問題まで含めて論じる。

【目次】

天動説は滅びない—まえがきにかえて／第一部 古典注釈を考え

る—ある誤読の歴史／一章 オコヅク考、オゴメク考—源氏物語帚木巻の異文の解釈／二章 オゴメク幻想—「オコヅク考、オゴメク考」補訂を兼ねて／三章 徒然草「鼻のほどおこめきて」考—統オゴメク幻想／第二部 武家説話の読み方—室鳩巢の和文／四章 読み物になった手紙—「鳩巢小説」とは何か／五章 書いたこと、書かなかったこと—写本と刊本の狭間で／六章 忠誠心はかくあるべし—浄瑠璃坂敵討と殉死をめぐる／七章 作品化される諫言—『明君家訓』から『駿台雑話』へ／附 『明君家訓』の成立と版本／第三部 伝説考証の読み方—『広益俗説弁』の世界／八章 巨木伝説考証近世篇—熊楠稿「巨樹の翁の話」追跡／九章 女流歌人伝説—檜垣姫説話をめぐって／第四部 典籍解題を考える—モノを伝える／十章 『十帖源氏』の異版と著者書入本—小城鍋島文庫本の位置づけ／十一章 『烏丸光榮卿口授』の成立と構成—国会図書館本を基にして／十二章 『名家手簡』版本管見—近世の複製本／附 シーラカンスの年齢／あとがき 初出一覧 人名・書名索引



デジタル学術空間の作り方

仏教学から提起する次世代人文学のモデル

下田正弘・永崎研宣編

ISBN978-4-909658-19-7 C0020

A5判・並製・384頁

定価：本体 2,800円（税別）

デジタルアーカイブ学会第3回学会賞



ライブラリアン、コンピュータサイエンティスト、人文学者…複数のプレイヤーによって共同で創りあげる、デジタル学術空間という「知」のかつてない新たな形態に、これまでどう対応してきたのか。そしてこれから、どうデジタル学術空間を創っていくのか。仏教学から提起する書。

第1部「デジタル学術空間の作り方」では、SAT 大蔵経テキストデータベース研究会がデジタル研究基盤を構築するにあたり実現してきたものを創成期（1994年）から現在までを詳述。第2部「仏教学とデジタル環境から見える課題」では、全体を「デジタル技術を作る・使う」「研究基盤を作る」の二つにわけ、研究者たちが課題の提起とともに、その解決の方向を示した。さいごに大向一輝（国立情報学研究所）によるコラム「デジタル学術空間の未来に向けて」で今後の展望を示す。

今後の人文学の展開には、日々生まれつつあるデジタル学知との対話が不可欠なものとなった現在、私たちは何をどう創り未来へと進むのか。その良きガイドになる書です。

【目次】 prologue 情報通信革命と人文学の課題（下田正弘）／

第1部 デジタル学術空間の作り方／chapter.01 デジタル学

術空間の作り方—SAT 大蔵経テキストデータベース研究会が実現してきたもの（下田正弘・永崎研宣）／第2部 仏教学とデジタル環境から見える課題／はじめに（下田正弘・永崎研宣）／I デジタルコンテンツを作る・使う／chapter.02 仏教論理学研究の現在と人文情報学（小野 基）／chapter.03 文字検索のさらなる地平に向けて—文字列の散在的一致を網羅するために（船山 徹）／chapter.04 仏典の切れはしを読む方法—「根本説一切有部律業事」新出サンスクリット写本の研究とデジタルデータ（八尾 史）／chapter.05 諸版対照テキストと註釈対象語句索引の作成をどうすすめるか—Samantapāsādikāの研究基盤を整備する（青野道彦）／chapter.06 一切経音義全文データベースの構築と研究（李乃琦）／chapter.07 チベット語大蔵経データベースの利用および本邦に伝存する漢語大蔵経とその調査の重要性と可能性（宮崎展昌）／chapter.08 引用出典検索・読解とデジタル化—曹洞宗学におけるデジタルアーカイブの活用（石井清純）／II 研究基盤を作る／chapter.09 中世の手書き写本のOCR 翻刻テスト報告（菱輪顕量）／chapter.10 慧琳撰『一切経音義』の符号化をめぐる（王一凡）／chapter.11 電子テキストの有効利用に関する雑感—文献資料のモデル構築の可能性（宮崎 泉）／chapter.12 サンスクリット文献電子データについての雑想（苦米地等流）／chapter.13 蘇州西園寺蔵『大正新脩大蔵経既刊分一覽』（昭和五年四月現在）に見られる刊行予定書目「付大正蔵刊行予定書目」と現行『大正蔵』の比較（落合俊典）／chapter.14 研究者による情報発信としての「学術ウェブサイト」の評価の行方（高橋晃一）／column デジタル学術空間の未来に向けて—縦割りではなく協働的な体制へ（大向一輝）／epilogue 人文学の将来（下田正弘）／

ネット文化資源の読み方・作り方

図書館・自治体・研究者必携ガイド

岡田一祐

ISBN978-4-909658-14-2 C0020

A5判・並製・232頁

定価：本体 2,400円（税別）

デジタルアーカイブ学会第2回学会賞



私たちが残すものは、私たちそのものだ。

インターネット環境において、文化資源のコレクションをバーチャル空間に作り上げる営みについて、多くの事例から縦横無尽に論じる書。日々変わりゆく社会のなかで、資料の公開やその方法論をどう考えて、理路を立てていけば良いか。文化を残すとはどういうことなのかという根源的な事柄から、デジタル・ヒューマニティーズの最新の成果や、情報発信の問題等々、これからのガイドとして、入門として、必読の書です。

本書はメールマガジン『人文情報学月報』（人文情報学月報編集室発行）の連載「Digital Japanese Studies 寸見」の2015年4月号掲載の第1回から2018年12月号掲載の第45回までの原稿をもとに加筆修正の上、関係画像を差し込むなどの編集を加え刊行するものです。

【目次】はじめに／タグによる本書の歩き方 MAP／■ 2015／第1回 インターネット上でほとんど利用することができなかった本文と索引の公開—『笠間索引叢刊』の一部が国文学研究資料館で公開に／第2回 日本文化研究で小規模デジタル・アーカイブズをどう使うか—TRC-ADEACのアーカイブ追加から考える／第3

回 一個人の草稿類アーカイブの公開—丸山眞男文庫草稿類デジタル・アーカイブ／第4回 クラウド・ソーシングを利用したデータ整備—「アジアにおける稲作と人口：日本の稲作（1883-1954）」／第5回 英語による学術情報・資源の発信—人間文化研究機構「English Resource Guide for Japanese Studies and Humanities in Japan」をもとに／第6回 蔵書目録があるデジタル・ライブラリー—九州大学附属図書館細川文庫のデジタル公開と蔵書目録／第7回 資料を世界につなぐということ—ウィキメディア・プロジェクトからの思いめぐらし／第8回 変体仮名のUnicode登録作業がはじまった／第9回 日本語古典籍のオープン・データセット—「国文研古典籍データセット（第0.1版）」の公開／■ 2016／第10回 コレクション共有から広がる展覧会、展覧会から広がるコレクション共有—アムステルダム国立美術館でBreitner: Meisje in kimono展が開催／第11回 日本の古文書文字をアプリで学ぶ—「変体仮名あぶり」「くずし字学習支援アプリ KuLA（クーラ）」「木簡・くずし字解説システム—MOJIZO—」／第12回 そのデータに住所はあるのか—利用者がどう参照できるかを意識して考える／第13回 データの公開は他者との交流の手はじめ—リンクト・データをどう活用していくか／第14回 文字データベースの現在—「『和翰名苑』仮名字体データベース」公開から考える／第15回 書誌書影・全文影像データベース—宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧／第16回 オープン・サイエンスという流れを前にして—日本学におけるデータ共有を考える／第17回 デジタルで「古典日本文化」をどう学ぶか—慶應義塾大学×FutureLearn「古典籍を通じて見る日本文化」ほか第45回まで掲載。

真山青果とは何者か？

星槎グループ [監修] 飯倉洋一・
日置貴之・真山蘭里 [編]

ISBN978-4-909658-15-9 C0095

A5判・並製・272頁

定価：本体 2,800円（税別）



元禄忠臣蔵の作者、真山青果。その驚くべき全貌を初めて明らかにする書。あまりに理屈っぽく長大な台詞、「暗い」人間認識は、今日の観客からは敬遠されるのかもしれない。しかし、こうした苦悩を描いた点にこそ、青果が昭和初期の大劇場を代表する劇作家として広く支持された理由があったのではないか。孤独感や人生のままならなさ、現代の人間にとってもけっして無縁のものとかならう。劇作家、小説家、研究者等、容易に捉えきれない様々な顔を持つ青果に、改めて光を当て、その全貌に迫る。

【目次】真山青果とは何者か（日置貴之）

1 交友関係

真山青果の交友関係見取り図

[ひとびと] 青果の多彩なる人脈（青木稔弥）

2 小説家・研究者

[小説家] 青果と国木田独歩（高野純子）

[研究者] 青果の西鶴研究（広嶋進）

[研究者] 真山青果の「切支丹屋敷」研究とシドッチ（大橋幸泰）

3 劇作家

[総説] 多面的劇作家としての青果—多彩な人物像（神山彰）

[元禄忠臣蔵] サムライの文学の伝統と近代—真山青果「大石最後の一日」（井上泰至）

[元禄忠臣蔵] 『元禄忠臣蔵』の「歴史的真相」—徳川綱豊の演能場面とその虚実（宮本圭造）

[明治から見る] 明治維新劇の系譜における青果（日置貴之）

[近代から見る] 三島由紀夫からみた青果（山中剛史）

[現代から見る] 【座談会】青果劇の上演をめぐる（中村梅玉・神山彰・中村哲郎・日置貴之・織田紘二）

[真山家のその後] 【インタビュー】真山家と新制作座の現在（真山蘭里・桑原寿紀）

4 青果作品小事典—戯曲・小説・評論・研究

01 南小泉村／02 敗北者／03 茗荷畑／04 第一人者／05 市川左団次氏に与ふ／06 癌腫／07 家鴨飼／08 喜多村緑郎／09 新しき種子を播け／10 五人女／11 松井須磨子の芸／12 七色珊瑚／13 椀屋久兵衛／14 酒中日記／15 仮名屋小梅／16 歴史小説の本領について／17 西鶴置土産／18 浅草寺境内／19 玄朴と長英／20 平将門／21 随筆滝沢馬琴／22 富岡先生／23 仙台方言考／24 江戸城総攻／25 小判拾壹両／26 桃中軒雲右衛門／27 坂本龍馬／28 颯風時代／29 井原西鶴の江戸居住時代／30 乃木将軍／31 血笑記／32 江藤新平／33 頼朝の死／34 荒川の佐吉／35 新門辰五郎／36 八百屋お七／37 元禄忠臣蔵 大石最後の一日／38 樽屋おせん／39 元禄忠臣蔵 御浜御殿綱豊卿／40 西鶴語彙考証（丹羽みさと・日置貴之・有澤知世・熊谷知子・河野光将・後藤隆基・寺田詩麻・仲沙織・福井拓也・村島彩加）

5 ビジュアルガイド—画像で辿る真山青果（青田寿美編）

附録 真山青果略年譜

〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典

長島弘明編

ISBN978-4-909658-13-5 C0095
A5判・並製・カバー装・552頁
定価：本体3,200円（税別）



けた外れに素晴らしく、とんでもなく面白い！
有名無名にかかわらず、とっておきの面白作品を厳選し、73項目・100作品以上から編んだ、はじめての江戸文学事典。同時に本書はめくるめく魅惑の江戸をもっと知りたいという欲求に応える、江戸文学という新世界への入門書です。読むのにも調べるのにも便利で、この1冊で江戸の文学がまるっと楽しめます。

本書からあふれ出す、明るく、雄々しく、気高く、やさしく、優雅な、そして、時には卑屈で、脳天気で、意地悪で、怠け者で、しみつたれた江戸人たちの息づかいは、読む人を心豊かに、幸せにしてくれるはずです。

【目次】

はじめに 使い方ガイド／1 まじめにふざける／『仁勢物語』『吉原徒然草』(古典のパロディー)／『通詩選笑知』『通詩選』『通詩選諺解』(狂詩)／『俳諧水滸伝』(俳諧逸話)／『桃太郎後日噺』『親敵討腹鼓』(黄表紙)／『大悲千祿本』(黄表紙)／『たから合の記』『狂文宝合記』(狂文)／『小野字尽』(滑稽本)／『しみのすみか物語』(噺本)／『醒睡笑』(笑話集)／『世間子息気質』『世間娘気質』『浮世親仁気質』(浮世草子)／『近世畸人伝』(伝記)／2 見る・観る・視る／『安永三年蕪村春興帖』(俳諧)／『粘飯籠前集』(俳諧)／『花

見次郎』と風状歳旦帖(俳諧)／『六帖詠草』(和歌)／『小紋新法』『小紋雅話』(滑稽本)／『本朝醉菩提全伝』『早替胸機関』(読本・滑稽本)／『邯鄲諸国物語』『南総里見八犬伝』『児雷也豪傑譚』(合巻・読本)／『正本製』(合巻)／『風船乗評判高閣』(歌舞伎)／『梅の由兵衛』もの(歌舞伎)／『身のかがみ』(仮名草子)／3 怖い？ かわいい？／『伽婢子』『人面瘡』(仮名草子)／『西鶴諸国はなし』『姿の飛乗物』(浮世草子)／『大石兵六夢物語』(実録)／『化物大江山』『心学早染草』(黄表紙)／『怪談摸摸夢字彙』(黄表紙)／『絵本玉藻譚』(読本)／『児雷也豪傑譚』(合巻)／『毛抜』(歌舞伎)／『百猫伝』(講談)／4 善人か？ 悪人か？／『英草紙』(読本)／『春雨物語』(読本)／『仮名手本忠臣蔵』(浄瑠璃)／『東海道四谷怪談』『菊宴月白波』(歌舞伎)／『賊禁秘談』(実録)／5 古代を幻想する／『松風村雨束帯鑑』『浦島年代記』(浄瑠璃)／『本朝水滸伝』(読本)／賀茂真淵の『万葉集』研究(国学)／『万句集』(狂歌)／『呵刈葎』(国学)／6 異郷に憧れる／『竹斎』(仮名草子)／『奥の細道』(俳諧紀行)／『異国旅すゝり』(漂流物語)／『椿説弓張月』(読本)／『天竺徳兵衛韓噺』(歌舞伎)／『竹堂詩鈔』(漢詩)／『風流志道軒伝』『和莊兵衛』(談義本)／『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』(国学)／7 恋する・愛する／『好色一代男』(浮世草子)／『男色大鑑』(浮世草子)／『魂胆色遊懐男』(浮世草子)／『一心二河白道』(浄瑠璃)／『卯月紅葉』『卯月の潤色』(浄瑠璃)／『西山物語』(読本)／『雨月物語』(読本)／『傾城買四十八手』(洒落本)／『春色梅児誉美』五部作(人情本)／『ひとりね』(随筆)／『追思録』(漢詩文)／8 ことばを磨く／『太祇歳旦帖』(俳諧)／『北寿老仙をいたむ』『春風馬堤曲』(俳詩)／『俳風柳多留』(川柳)／『訳註聯珠詩格』(漢詩)／『風来六部集』(狂文)／9 物語を織る／『義経千本桜』『渡海屋・大物浦』(浄瑠璃)／『志賀の敵討』(浄瑠璃)／『隅田川花御所染』(歌舞伎)／『三人吉三廓初買』(歌舞伎)／『三題咄高座新作』(歌舞伎)／『怪談牡丹燈籠』(人情噺)／『修紫田舎源氏』(合巻)／『南総里見八犬伝』(読本)／執筆者一覧／江戸文学を楽しむための用語集／奇と妙の江戸文学年表／主要事項索引／主要人名索引／ジャンル別項目一覧／掲載図版索引

歴史情報学の教科書

歴史のデータが世界をひらく

国立歴史民俗博物館監修
後藤真・橋本雄太編

ISBN978-4-909658-12-8 C0020
A5判・並製・208頁
定価：本体1,900円（税別）

人文学に必要なこれからの情報基盤の作り方は、複数の手段を用いて、新たな歴史像に迫るために。情報を共有して課題を解決するプラットフォームを構築するために。情報を可視化して、社会の深層にコミットしていくために。人文学は社会そのものを考え、社会のあるべき姿を考える学問である。その可能性を追求するために、強力な援軍となっている歴史情報学の現在と未来を解説し、学問の基盤の今後を問ひかけ、参加を促す。歴史情報学で出来ることを、まずは知るところからはじめよう！

人文学研究者はもとより、行政機関、図書館・博物館等の学術機関などにだすさわる方必携の書。執筆は、後藤真、橋本雄太、山田太造、中村覚、北本朝展、天野真志、関野樹、鈴木卓治、永崎研宣、大河内智之。

【目次】

はじめに(後藤真)
chapter1 人文情報学と歴史学 後藤真(国立歴史民俗博物館)
chapter2 歴史データをつなぐこと—目録データ— 山田太造(東京大学史料編纂所)

chapter3 歴史データをつなぐこと—画像データ— 中村覚(東京大学情報基盤センター)
●column.1 画像データの分析から歴史を探る—「武鑑全集」における「差読」の可能性— 北本朝展(ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所)
chapter4 歴史データをひらくこと—オープンデータ— 橋本雄太(国立歴史民俗博物館)
chapter5 歴史データをひらくこと—クラウドの可能性— 橋本雄太(国立歴史民俗博物館)
chapter6 歴史データはどのように使うのか—災害時の歴史文化資料と情報— 天野真志(国立歴史民俗博物館)
●column.2 歴史データにおける時空間情報の活用 関野樹(国際日本文化研究センター)
chapter7 歴史データはどのように使うのか—博物館展示とデジタルデータ— 鈴木卓治(国立歴史民俗博物館)
chapter8 歴史データのさまざまな応用—Text Encoding Initiativeの現在— 永崎研宣(人文情報学研究所)
chapter9 デジタルアーカイブの現在とデータ持続性 後藤真(国立歴史民俗博物館)
●column.3 さわれる文化財レプリカとお身代わり仏像—3Dデータで歴史と信仰の継承を支える— 大河内智之(和歌山県立博物館)
chapter10 歴史情報学の未来 後藤真(国立歴史民俗博物館)
おわりに
用語集 学会・雑誌案内 大学案内



二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎

ビュールク トーヴェ

ISBN978-4-909658-09-8 C0095
A5判・上製・カバー装・272頁・
カラー口絵2頁
定価：本体 6,000円（税別）

江戸の歌舞伎劇場という一大商業圏は、こうして成立した。役者と観客が文学、信仰、風俗を共有し、茶屋や商人を巻き込む要となった江戸歌舞伎劇場。歌舞伎の転換期といわれる享保期（1716～1736年）、二代目市川團十郎はそこでなにを演じ、どのように劇場を切り盛りしたのか？ 遺された日記「老のたのしみ」「柿表紙」「柏庭日記」「病中日記」「市川團十郎日記発句集」の写本をはじめとした膨大な資料を駆使し、第一部「享保期の江戸歌舞伎」で二代目團十郎の演技・演出について、第二部「享保期歌舞伎の興行」で江戸歌舞伎劇場経営の役割について実態を解明する。欧米演劇研究の文脈で歌舞伎をとらえる端緒となる画期的研究書。江戸歌舞伎の「転換期」に何が起こっていたのか。そこには、役者・二代目團十郎が身分を超えて観客と、歌舞伎劇場は業種を超えて近隣商業を巻き込み、それぞれ発展していく姿があった。推薦＝武井協三〔国文学研究資料館名誉教授〕「18世紀歌舞伎の、演技や興行の実態に肉迫する」、ロバート キャンベル〔国文学研究資料館館長〕「時代の空気と動きと芝居の面白さを読者の眼前に運び込んでくれる」。

【公共圏としての江戸歌舞伎劇場が、なぜ享保期に発生したのだろうか。それは、この時期に江戸歌舞伎劇場をめぐって形成された商業圏と関連しているのではないか。

江戸の歌舞伎興行と寺社の開帳興行は互いに影響し合いながら、両者とも集客に努めた。芝居茶屋は歌舞伎劇場の棧敷席を管理し、飲食のサービスを提供するようになった。歌舞伎役者はもぐさなどの商品を宣伝し、せりふ正本や番付など出版物を制作した。このように歌舞伎劇場はさまざまな業者を巻き込み、大きな商業圏を形成していた。江戸歌舞伎劇場はその要だった。】…おわりにより

【目次】

- カラー口絵
- はじめに
- 第一部 享保期の江戸歌舞伎—二代目團十郎と演出の種々相
- 第1章 二代目團十郎の読書体験と演技・演出
- 第2章 江戸の開帳興行—不動明王の演技・演出を中心に
- 第3章 宣伝の演出と印刷物の制作—もぐさ売りを中心に
- 第4章 「助六」と喫煙の演出
- 第二部 享保期江戸歌舞伎の興行
- 第5章 享保期江戸歌舞伎の劇場経営
- 第6章 森田座の休座と控檣による河原崎座の旗揚げ
- 第7章 享保期の芝居茶屋
- 第8章 江戸歌舞伎の観客
- おわりに
- あとがき 初出一覧
- 索引（人名・役名／書名・作品名・事項）



江戸の子どもの絵本

三〇〇年前の読書世界にタイムトラベル！

叢の会編

ISBN978-4-909658-10-4 C0095
A5判・並製・112頁
定価：本体 1,000円（税別）

江戸時代の桃太郎、かちかち山、金太郎は今とはちょっと違っていた。昔の登場人物たちに会いに行こう！

日本の子どもたちが本を読むようになったのはいつ頃からだろうか。この疑問を考えると、江戸時代の絵入り本はさまざまな情報を提供してくれる。特に江戸時代中期頃に上方（関西）で出版された「草双紙」は、子どもたちも読んだと思われる作品群として注目されている。本書はそれらの中でも多種多様な内容をもつ「赤本」などから四作品（桃太郎、かちかち山、金太郎、寺子短歌）を取り上げ、原典と関連資料を収録。原典は読みやすくした翻刻付き。じっくりと内容を読み、関連資料と読み合わせることで、子どもと本をめぐる課題をいろいろな視点から考えられるようにしてある。江戸の子どもの絵本入門！

※本書は2006年に刊行された『江戸の子どもの本 赤本と寺子屋の世界』（笠間書院）を改訂、参考資料を増補の上、書名を改めて刊行するものです。

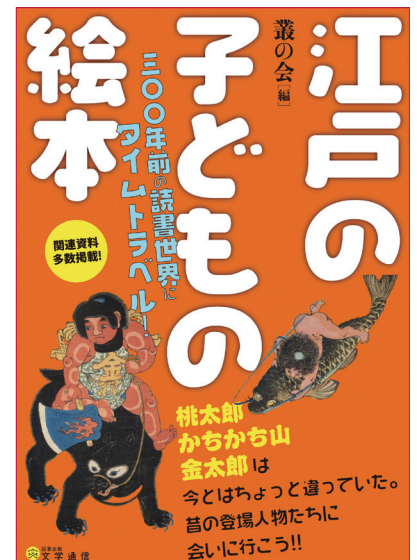
【目次】

解説—「赤本」とはどのようなものか
凡例

桃太郎昔語
きんときおさなだち
兎大手柄
寺子短歌

資料編
桃太郎（巖谷小波）
キンタラウ（巖谷小波）
かちかち山（浜田広介）
浮世風呂（式亭三馬）
二巻巻之上より
小野篁歌字尽

資料編解説
参考文献一覧
主要変体仮名一覧



紙が語る幕末出版史

『開版指針』から解き明かす

白戸満喜子

ISBN978-4-909658-05-0 C0095
A5判・上製・カバー装・436頁
(4頁カラー口絵+432頁)
定価：本体9,500円(税別)

書物の近代化は江戸時代からはじまっていた。和紙から洋紙へ、和本から洋本へ。書物の形態が変化するとき、人は何を考え何をを目指すのか。幕末にこれからの出版を考えるために編まれた、出版統制に関する記事を集めた資料、『開版指針』(写本)の全貌を初めて紹介。この文献記録の分析を行い、同時に顕微鏡による料紙観察という新たな書誌学的手法を取り入れ、江戸末期から明治期にかけての日本における書物の変容について考察する。文献に記録された情報と、書籍を構成する紙を分析することで捉えられた、新しい日本幕末出版史。書物・書籍はどのような要因・条件をもって作り上げられてきたのか。その根源に迫る。

【目次】
序論 新たな書誌学的方法で「蔭」の幕末出版史を解き明かす／
第一章 『開版指針』にみる幕末の書物事情／第一節 『開版指針』書誌事項／第二節 『開版指針』翻刻と解説／第三節 『開版指針』の構成／**第二章 『開版指針』成立の背景**／第一節 『開版指針』と他資料の比較／第二節 『開版指針』と筒井政憲／第三

節 『開版指針』と蕃書調所／第四節 『開版指針』が目指した〈指針〉／**第三章 紙質にみる書物の多様性と近代化**／第一節 料紙観察という方法／第一項 紙の基本情報／第二項 製紙の基本原則／第二節 各種版本の調査結果／第一項 蘭書の料紙観察／第二項 画譜類の料紙観察／第三項 須原屋系列書肆出版物の料紙観察／第四項 歙形蕙齋作品の料紙観察／第五項 森島中良著作の料紙観察／第六項 江戸期から始まっていた料紙の近代化／**第三節 明治期の書物にみる料紙**／第一項 『当世書生気質』の書誌情報と料紙観察結果の比較／第二項 『和獨對譯字林』にみる明治期の洋紙／**第四節 作品に描かれた紙—原料や製法から見た紙の違い**／第一項 『御存商売物』における紙—山東京伝の感覚／第二項 明治期における紙—作家たちが捉えた和紙から洋紙への変化／第三項 『黄金虫』における紙—アメリカでの紙質変化／第四項 『書林清話』における紙—中国での紙質変化／**第五節 漢籍複製の挫折—竹紙は何故生産できなかったのか**／第一項 竹紙原料モウソウチクの招来／第二項 薩摩における竹紙と漢籍／**第六節 紙質からみる『開版指針』と筒井政憲**／結び 『開版指針』と書物の近代化—伏流の書誌学／索引(人名・書名)

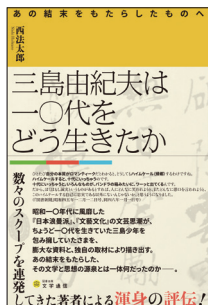


三島由紀夫は一〇代をどう生きたか

あの結末をもたらしたもののへ

西法太郎

ISBN978-4-909658-02-9 C0095
四六判・上製・358頁
定価：本体3,200円(税別)



数々の、三島由紀夫に関するスクープを連発してきた著者による渾身の評伝。昭和一〇年代に風靡した『日本浪漫派』、『文藝文化』の文芸思潮が、ちょうど一〇代を生きていた三島少年を包み擁していたさまを、膨大な資料と、独自の取材により描き出す。あの結末をもたらした、その文学と思想の源泉とは一体何だったのか。東文彦、保田與重郎、蓮田善明の三者と、それらを横軸でつなぐ神風連を中心に、一〇代の三島とその生涯の秘密を探り出す。なお本書冒頭のプロローグにて、三島由紀夫の墓所に関するスクープを掲載しています。「ひとたび自分の本質がロマンティックだとわかると、どうしてもハイムケール(帰郷)するわけですね。ハイムケールすると、十代にいっちゃうのです。十代にいっちゃうと、いろんなものが、パンドラの箱みたいに、ワーツと出てくるんです。だから、ぼくはもし誠実というものがあるとすれば、人にどんなに笑われようと、またどんなに悪口を言われようと、このハイムケールする自己に忠実である以外にないんじゃないか、と思うようになりました。」(『図書新聞』昭和四五年一二月一二日号、同四六年一月一

日号)
【目次】
[凡例]
プロローグ—三島由紀夫がさだめた自分だけの墓所

序章 結縁—神風連(しんぷうれん)
「約百名の元サムライ」の叛乱／日本の火山の地底／志士の遺墨／「櫻園の大人」／宇気比のこと／宣長の思想と櫻園／神風連の遺跡を巡る／「恐ろしき一夜」／「日本人の神髓、を考えたい」／手段=目的、目的=手段／天皇は「一般意志」の象徴／無償の行動／喪った「故郷」の発見

第一章 邂逅—東文彦(あずまふみこ)
先輩からの賛嘆の手紙／至福の抛り処／永福門院と「三熊野詣」／「幼い詩人」／東文彦の死、至福のときの畢り／遺稿集『浅間』／文彦と三島のニーチェ／ハイムクンフトとハイムケール／『城下の人』受賞のかげに三島の強力な推巻／『春の雪』冒頭に塗りこめられたもの／戦いを勝利にみちびいた真清の決死行／「得利寺付近の戦死者の弔祭」の写真は実在している／一対の作品集

第二章 屈折—保田與重郎(やすだよじゅうろう)
一〇代の思想形成／日本浪漫派／保田と満洲事変／昭和一〇年代の保田の魔力／『近代の終焉』／「思想戦、をたたかっていた／時局迎合のアジテーターではなかった／「誤認される原因の種子をみずから蒔いた」保田／堂々男子は死んでもよい／日本美術院院歌／禁忌の象徴／晦渋な文章ばかりではない／ヘルダーリンとの相似性／「アイロニーを解決するただ一つの方法」／国体思想は「変革の思想」／「欧化としての近代化」批判／三島の韜晦／謡曲の文体はつづれ錦／保田への素直な思い、ほか。

第三章 黙契—蓮田善明(はすだぜんめい)

全訳 男色大鑑〈武士編〉

染谷智幸・畑中千晶編

ISBN978-4-909658-03-6 C0095
四六判・並製・240頁
(8頁カラー口絵+232頁)
定価：本体1,800円(税別)

殺されたい、愛するお前に…。おお、これが究極の純愛というヤツなのか。

井原西鶴が1687年に描き出した、詩情あふれる華麗・勇武な男色物語が、遂に現代に甦る。

若衆と念者の「死をも辞さない強い絆」は、常に焦点ととして描かれる三角関係の緊張感とともに、長い間、誠の愛を渴望して止まぬ人々の心を密かに潤し続けてきた。

世界の奇書として名高い『男色大鑑』。全集でしか読めなかった作品群が、わかりやすい現代語と豪華漫画家陣[あんどうれい、大竹直子、九州男児、こふで、紗久楽さわ]の挿絵によって鮮やかに息を吹き返す。

天才、井原西鶴による300年前のストーリーが今ここに復活。魅惑の古典世界への道しるべが、ここに登場。古典文学は、ここから学ぶと絶対楽しい！

本書は『男色大鑑』八巻中、前半の武家社会の衆道に取材した作品四巻までを収録(後半の四巻は2019年6月に刊行予定)。

現代語訳は、佐藤智子、杉本紀子、染谷智幸、畑中千晶、濱口順一、浜田泰彦、早川由美、松村美奈。

【目次】

- ・カラー口絵(あんどうれい、大竹直子、九州男児、こふで、紗久楽さわ)
- ・[図解] 若衆図(若衆とその髪型)
- ・巻頭言 初めての古典が『男色大鑑』でもいいんじゃないか(畑中千晶)
- ・お読みになるまえに こんな現代語訳を目指しました/こんな「おまけ」も付けました

序/巻1/巻2/巻3/巻4

解説1

マルチOS西鶴の『男色大鑑』(畑中千晶)

- 一、西鶴その人
- 二、西鶴の文章
- 三、『男色大鑑』という作品

解説2

男色の楽しみと衆道の歴史(染谷智幸)

- 一、はじめに
- 二、男色、二つの世界
- 三、浄の男道
- 四、若衆の意気地と武士の綺羅
- 五、おわりに

あとがき—そして、歌舞伎若衆編へ。なんと作者西鶴が登場！(染谷智幸)



全訳 男色大鑑〈歌舞伎若衆編〉

染谷智幸・畑中千晶編

ISBN978-4-909658-04-3 C0095
四六判・並製・254頁(8頁カラー口絵+246頁)
定価：本体1,800円(税別)



西鶴がオレ様全開で描き尽くした歌舞伎若衆図鑑、遂にわかりやすい現代語で登場。

若衆(江戸のジャニーズ Jr.?)に熱を入れすぎで、遂に西鶴本人も登場し、なんと脱ぎます(実話)。

本書の舞台は歌舞伎が演劇として確立する直前の激動の時代。歌舞伎劇場は今とは全く違う、まさに小屋。今でいえば、50人くらいが入る場末のストリップ小屋に200人くらいが雪崩れ込むような場所。「いっそのこと殺してくれ」と、歌舞伎若衆の美しい目元に心射ぬかれた見物客たちが満ちて、美しさに酔い痴れた観客が叫ぶような場所。

西鶴はそんな凄艶な世界を愛しすぎるゆえに「この道すきもの我なれば」(歌舞伎に関してはほかの誰よりも通じている私なので)、遂に自ら作品中にさえ顔を出す始末。この躍動感にあふれる世界で、西鶴が描き出したものは何か。役者のファンブックの自主制作してしまう人や、敏腕プロデューサー等も登場、現代の文化とも通じる、熱狂する心と、それを取り巻く人々を鮮やかに描写しています。さまざまな愛の形をお楽しみ下さい！

【目次】

- ・あなたの心が今、求めているのはどの若衆?—衆門の十哲
- ・カラー口絵(あんどうれい、大竹直子、九州男児、こふで、紗久楽さわ)
- ・若衆10人のキャラ分析グラフ
- 巻頭言「殺じをれ!」のオレ様若衆図鑑(染谷智幸)
- お読みになるまえに こんな現代語訳を目指しました/こんな「目玉」があります
- 巻5/巻6

コラム 歌舞伎の「ほめことば」(河合真澄)

巻7/巻8

解説1 西鶴の推し若衆ナンバーワン上村辰弥(早川由美)

- 一 辰弥はよい子
- 二 時代の求める芸風とは
- 三 辰弥の生い立ち
- 四 西鶴の好み

解説2 若衆を知らずして歌舞伎を語るなけれ—歌舞伎の歴史と若衆—(染谷智幸)

- 一 阿国歌舞伎は倒錯のオンパレード
- 二 受け継がれる歌舞伎のDNA
- 三 「女歌舞伎が禁止されて若衆歌舞伎が起こった」は誤り
- 四 若衆歌舞伎の源流は中世の稚児文化
- 五 モードとしての野郎帽子
- 六 『男色大鑑』後半は歌舞伎の激動期
- 七 『男色大鑑』登場の役者たちは、いつ活躍したのか

資料

歌舞伎役者(代表的)の活躍時期一覧

歌舞伎役者の役柄説明

当時の舞台はどんな構造?

西鶴当時の歌舞伎が体感できる! 京都図

西鶴当時の歌舞伎が体感できる! 大阪図

あとがき—若衆、それは寿命を延ばす薬(畑中千晶)

役者ファンブックの自主制作/敏腕プロデューサー/役者遊びの世界/熱狂する心と、取り巻く人々

国語の授業の作り方

はじめての授業マニュアル

古田尚行

ISBN978-4-909658-01-2 C1037

A5判・並製・320頁

定価：本体 2,700円（税別）



教育実習生とその指導教員のために。これから教員になる人と、すでに教壇に立っているすべての人に。

本書は、中学校・高等学校で初めて授業をすることになる教育実習生を念頭に、実際に国語の授業を組み立てていくノウハウを、授業を詰めていく過程や、振る舞いや言葉遣い、それらを支える考え方や思想、またその意味など、いわゆる暗黙知とされている部分まで踏み込み、言語化して伝えます。

全体を「授業の前に」「授業中のこと」「授業の後に」「授業作りのヒント集」「授業作りで直面する根本問題」「授業の作り方・事例編」「教材研究のための文献ガイド」の7章で構成。

どのような学校に勤めようが、どのような授業になろうが、それらに適応する普遍的な国語の授業方法や視点があるとの考えから述べられているので、既に現場に出ている教員にとっても、普段の授業を見直すことができるものにもなっています。また本書で提示される具体的な授業作りは、教育現場と文学・語学研究の場との乖離の問題をより深く見つめ直せるものにもなっています。国語教育や文学研究に携わる人すべてに読んでもらいたい、はじめての授業マニュアルです。

【目次】

はじめに／第1章 授業の前に／第2章 授業中のこと／第3章 授業の後に／第4章 授業作りのヒント集／①信頼される教員とは／②教材を結びつける方法／③「語り」を知り、「語り方」を考え直す／④その言葉は誰に向けての言葉か—聴き手意識、読み手意識から考える／⑤教室の中の「笑い」／⑥ブックトークと読書／⑦状況に応じて言葉を選択するヒント／⑧支援の必要な生徒のために／第5章 授業作りで直面する根本問題／第6章 授業の作り方・事例編／①中学3年生—『枕草子』『香炉峰の雪』（学校図書『中学校国語3』）／②中学2年生—『枕草子』『九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の』（東京書籍『新しい国語2』）／③高校2年生—『枕草子』『村上の先帝の御時に』（第一学習社『古典B 古文編』）／④高校2年生—『徒然草』『ある者、子を法師になして』（第一学習社『古典B 古文編』）／⑤高校2年生—『焚燬、頭髮上指す』『史記』『鴻門之会』（第一学習社『古典B 漢文編』）／⑥高校2年生—夏目漱石『こころ』（三省堂『現代文B』）／⑦高校2年生—李白『独坐敬亭山（独り敬亭山に坐す）』（第一学習社『高等学校古典B漢文編』）／⑧高校2年生—『平家物語』『忠度の都落ち』（第一学習社『古典B 古文編』）／⑨中学1年生—芥川龍之介『蜘蛛の糸』（教育出版『伝え合う言葉 中学国語1』）／第7章 教材研究のための文献ガイド／①現代文のキーワード、背景知識／②文章構造、文章表現／③哲学・現代思想／④言葉の世界／⑤ライトノベル・ヤングアダルト・アニメ・コミック／⑥古文・和歌／⑦日本史・宗教史・文学史／⑧古典文法・文字／⑨漢文・漢字／⑩教材分析・国語科教育学／⑪メディア・リテラシー／⑫授業実践・海外の取り組み・生徒の多様化／⑬文学理論／⑭読みの技術／⑮日本と日本語を外からの視点で捉える／⑯発想の転換／⑰副教材・入試問題／⑱情報検索／おわりに 注 参考文献 キーワード索引

なぜ古典を勉強するのか

近代を古典で読み解くために

前田雅之

ISBN978-4-909658-00-5 C0095

四六判・上製・336頁

定価：本体 3,200円（税別）

なぜ古典を勉強するのか。私たちが生きるこの時代は、古典的教養とは不要なものなのであろうか。過去とつながっている、今この時代を読み解く、実践的古典入門。全体を「古典入門」「古典で今を読み解く」「古典と近代の歴史を知る」に分け、レクチャー。「近代を相対しうる最も強力な装置が古典である」という著者の思想のもと、今とつながっている古典文学の新しい見方を次々と繰り出し、読む者の視界を広げ、古典を勉強する意義を伝える、刺激的な書。【大きく断絶しているとはいえ、我々の言葉は過去と繋がっているといった意味で、古典の世界＝前近代社会の延長にある現在に生きていることも否定できない事実としてある。古典と近代を相互批判しながら、古典の世界を破壊した近代を批判し評価していくことを通して、より新鮮な気持ちで古典の世界、と同時に近代的世界と対峙することが可能となるのではないか。その先にはまだ見たことのない世界像が立ち現れるのではないか、勉強をしていて何が快感か。世界像なるものが見えるような線がうっすらと浮かんで来る時である。】

【目次】

はじめに—勉強をしていて何が快感か／Part.1 古典入門 その

1…教養と伝統の世界を知る／1 昔の人は教養があったのか／2 注釈学事始め／3 古典的公共圏とは何か—和歌が減びなかった秘密／4 伝統の作られ方／Part.2 古典で今を読み解く その1…歴史・伝統・古典／1 「日本共産党」の古典的意義／2 アメリカ、「新大陸」における伝統とは何か／3 天皇制度を永続させるために／4 品格ある二等国になること／5 日本における国・国民・国民主義—対抗原理なき国民主義は可能か／6 日本人論を終わらせるために—優越感なる劣情からの脱却／7 日本・日本人はどこにも行かないだろう／8 成績という文化—近代のアイロニー／Part.3 古典入門 その2…和歌と文化の厚みを知る／1 和文にスタンダードはあったのか—和歌のあり方とは／2 藤原俊成の古典意識—生き、活動する原点にあるものとは／3 アヴァンギャルドと伝統—孤語「ゑごゑご」考／4 文化の厚みを知る方法—明星本『正広自歌合』をめぐる／Part.4 古典で今を読み解く その2…戦乱・和歌・古典／1 古典・和歌は平和の産物ではない／2 乱世到来、いよいよルネサンスだ／3 破局・古典・復興—精神の危機を乗り越えるために／Part.5 古典と近代の歴史を知る／1 国文学始動元年、明治二十三年の夢と幻滅—国学・国文学・井上毅／2 古典と出会う、戦時・戦中という時空—清水文雄『戦中日記』を読む／3 研究者共同体と大衆文化—その歴史と国文学の人畜無害化／初出一覧 あとがき





日本史史料研究会ブックス005 戦国時代と一向一揆

日本史史料研究会監修・竹間芳明

ISBN978-4-909658-55-5 C0221
新書判・並製・272頁
定価：本体1,600円（税別）

それはそもそもどういふ闘争だったのか。一口に一向一揆と言っても、これを一括りにまとめることは困難である。本書は、現時点で明らかにされている一向一揆の多様性について、各時代の社会・地域の状況、政治過程に沿いながら、可能な限り提示する。蓮如から顕如に至る四代にわたる時代を第一章から第四章に分け、それぞれの時代の一向一揆について、政治状況を中心に地域性を考慮し、関係系図等を付すなど、丁寧に記述する。戦国期の人間の様相を炙り出す、一向一揆入門ともいべき書。



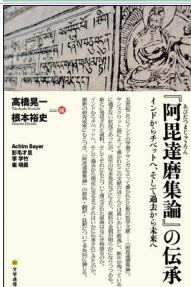
言いなりにならない江戸の百姓たち

「幸谷村酒井家文書」から読み解く

渡辺尚志

ISBN978-4-909658-56-2 C0221
四六判・並製・168頁
定価：本体1,500円（税別）

江戸時代の人口の約八割は、村に住む百姓たちだった。今日、一般庶民の世論や動向が政治のあり方や国の進路を決定づけているのと同様に、江戸時代も、社会の圧倒的多数者だった百姓たちの行動様式や思考パターンこそが、社会の常識や趨勢をかたちづけていたといえる。本書はそんな百姓たちの実像を、幸谷村酒井家文書から読み解いていく。古文書を丁寧に読み解く方法から、その歴史に迫る方法まで、歴史を自力で読み解く際にも有効な書。明らかになる、協力しあい暮らしを守るたくましい百姓たち。



『阿毘達磨集論』の伝承

インドからチベットへ、そして過去から未来へ

高橋晃一・根本裕史編

ISBN978-4-909658-51-7 C3015
A5判・並製・162頁
定価：本体2,400円（税別）

5世紀ごろにインドの学僧アサンガによって書かれた仏教の哲学文献、『阿毘達磨集論』。もともとサンスクリット語によって書かれたこの文献のほとんどは長いあいだ散逸し、断片が残っているに過ぎない状況であったが、近年の写本発見などにより、資料の全貌が明らかになりつつある。新たに発見された資料、そしてそれらもとづいて復元された原典はなにを物語るのか。インドからチベットへ、そして過去から現在に至るまでそれはいかに伝承されてきたのか。



REKIHAKU 特集・されど歴史

国立歴史民俗博物館・山田慎也・内田順子・橋本雄太編

ISBN978-4-909658-38-8 C0021
A5判・並製・112頁・フルカラー
定価：本体1,091円（税別）

国立歴史民俗博物館発！歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』。いまという時代を生きるのに必要な、最先端でもおもしろい歴史と文化に関する研究の成果をわかりやすく伝えます。先を見通せないこんな時代に、歴史の研究は役に立つということではできるのか。そんな問いをよそに、こりかたまった思考を解放したり、知的好奇心がうずいたり、境界を広げるような研究が日々生まれている。立ち位置をかせ、ものごとを注意深く観察することで、新たな光を見つけようとする、そんな研究のリアルな現場を、率直に伝えます。

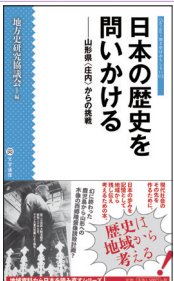


REKIHAKU 特集・いまこそ、東アジア交流史

国立歴史民俗博物館・高田貫太・橋本雄太編

ISBN978-4-909658-43-2 C0021
A5判・並製・112頁・フルカラー
定価：本体1,091円（税別）

国立歴史民俗博物館発！歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』。いまという時代を生きるのに必要な、最先端でもおもしろい歴史と文化に関する研究の成果をわかりやすく伝えます。自国中心主義、排外主義、社会分断化の潮流のなかで。国家とそこに暮らす人々を同一視し、たがいに批評し、知らず知らずのうちに差別しあうことが当たり前になってしまった、そんな日常のなかで。未来へ進むボートをうまく操るために、特集を編みました。さまざまな境界をまたいで交流した人々の歴史を紡いでいきます。



地方史はおもしろい03 日本の歴史を問いかける

山形県〈庄内〉からの挑戦

地方史研究協議会編

ISBN978-4-909658-52-4 C0221
新書判・並製・272頁
定価：本体1,500円（税別）

現代社会のその先を作るために。日本の歩みを記憶として地域から残し伝え考えるための本。地方史研究協議会がお届けする、日本史ファン、研究者必携のシリーズ3冊目。本書では山形県の庄内地域を取り上げる。地域にゆかりある史料を読み解き、政治・文化・経済・人物など、さまざまなトピックから地域の歴史に迫ることで、日本の歴史全体への逆照射を試みた、まさに山形県庄内からの挑戦。地域史の面白さを存分に味わえます。



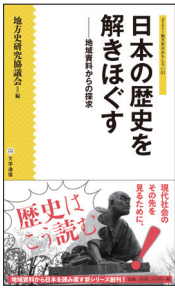
地方史はおもしろい02 日本の歴史を原点から探る

域資料との出会い

地方史研究協議会編

ISBN978-4-909658-40-1 C0221
新書判・並製・272頁
定価：本体1,500円（税別）

現代社会のその先を作るために。日本の歩みを記憶として地域から残し伝え考えるための本。地方史研究協議会がお届けする、日本史ファン、研究者必携のシリーズ2冊目。地域資料を読み解き考え抜くことで、歴史的な視点をどう手に入れるのか。各地域に残された資料や歴史的な事柄を通して、自らの地域や日本の将来を考える手がかりにするべく、それぞれの資料に向き合ってきた新進の研究者が、歴史の読み解き方をふんだんに伝える。



地方史はおもしろい01
日本の歴史を解きほぐす
 地域資料からの探求
 地方史研究協議会編

ISBN978-4-909658-28-9 C0221
 新書判・並製・272頁
 定価：本体 1,500円（税別）

現代社会のその先を作るために。日本の歩みを記憶として地域から残し伝え考えるための本。地方史研究協議会がお届けする、日本史ファン、研究者必携のシリーズ1冊目。
 地域資料から日本の歴史を読み解くと、さらに歴史がおもしろくなり、現代社会もその先に見えてきます。本書は、各地域に残された資料や歴史的な事柄を通して、住まいの地域や日本の将来を考える手がかりにするべく、それぞれの資料に向き合ってきた新進の研究者が、歴史の読み解き方をふんだんに伝える書。



草の根歴史学の未来をどう作るか
 これからの地域史研究のために

黒田智・吉岡由哲編

ISBN978-4-909658-18-0 C0021
 A5判・並製・カバー装・304頁
 定価：本体 2,700円（税別）

地域には、これまで縦割りに区分され、歴史史料としてみなされることのなかった手つかずの史料が膨大に眠っている。史料学の成果を地域史研究に生かすということを中心に、若い執筆陣たちがさまざまな史料と格闘して生み出した書。金沢大学の卒業生・修了生、大学院の修士・博士後期課程の在籍者・修了者らが執筆。執筆陣のほとんどは、北陸・東海地域の小・中・高校で学校教育に携わっている現職教員である。これからの地域史研究の参考になることを目指すべく工夫をこらす。



日本史史料研究会ブックス003
六波羅探題 研究の軌跡
 研究史ハンドブック

久保田和彦

ISBN978-4-909658-21-0 C0221
 新書判・並製・240頁
 定価：本体 1,200円（税別）

承久の乱に勝利した鎌倉幕府が京都六波羅に設置した、「幕府の出先として朝廷を監視し、武家の安全のためにしっかりがんばる」機関とされてきた、六波羅探題。本書は、その研究史を詳細に跡づけることで、その成立と展開、探題の発給文書、探題の職務と歴史的役割、鎌倉幕府・朝廷と探題との関係、鎌倉後期・幕府滅亡にいたる畿内の変化と探題の滅亡など、六波羅探題に関する様々な問題をわかりやすくまとめた書である。六波羅探題の知名度を少しでも高め、また歴史学の研究において、研究史を詳細に跡づけることがどんなに大切かを、日本中世史の研究者をはじめとして伝えていこうとする。

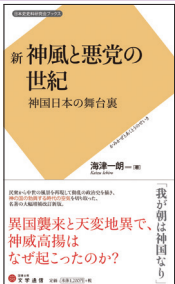


日本史史料研究会ブックス004
ここまでわかった 戦国時代の天皇と公家衆たち
 天皇制度は存亡の危機だったのか？ 新装版

日本史史料研究会監修・神田裕理編

ISBN978-4-909658-33-3 C0221
 新書判・並製・288頁
 定価：本体 1,350円（税別）

戦国時代、朝廷や公家は無力な存在で、単なるお飾りだったのか。伝統の権威をふりかざしてただけの存在だったのか？先行している戦国時代のイメージの嘘を覆す。天皇と貴族たちはこの時期どう生きていたのか。武士たちの陰に隠れ謎に包まれていた朝廷勢力の実像を13のテーマで解明する。



日本史史料研究会ブックス002
新神風と悪党の世紀
 神国日本の舞台裏

海津一朗

ISBN978-4-909658-07-4 C0221
 新書判・並製・256頁
 定価：本体 1,200円（税別）

それにしても、祈禱という現実的な効果のまったく期待できない政策がこれほどまでに重んじられ、大風が吹いたのも神の加護のおかげだと考えられるようになったのは、なぜなのだろう。異国襲来と天変地異で、神威高揚はなぜ起こったのか。民衆から中世の風景を再現して動乱の政治史を描き、神の国の勃興する時代の空気を切り取った、名著の大幅増補改訂新版。【大風が吹いたのも神の加護のおかげだと考えられるようになったのは、なぜなのだろう。「我が朝は神国なり」と言って伊勢神宮への奉幣にこだわる朝廷、神領興行法という不可解な法令を出して武士たちの所領を奪い伊勢神宮に与えた幕府—このような神威の高揚はどうして起こったのか。】



日本史史料研究会ブックス001
新徴組の真実にせまる
 最後の組士が証言する 清河八郎・浪士組・新選組・新徴組

西脇 康編著

ISBN978-4-909658-06-7 C0221
 新書判・並製・306頁
 定価：本体 1,300円（税別）

骨抜きにされた、知られざる幕末の剣客集団の真実にせまる。京都で分裂した浪士組。ごく一部が異を唱え誕生したのが、かの新選組であったが、圧倒的多数は、江戸に引き上げた。そこで誕生したのが、新徴組である。彼らはいわば、幕末の剣客集団の本家であった。その後、彼らはいかに生きたのか。新徴組を語る証言録を、やさしく読めるようにし、基礎史料として公開する。



中華オタク用語辞典
 はちこ

ISBN978-4-909658-08-1 C0587
 四六判・並製・232頁
 定価：本体 1,800円（税別）

中華オタクコミュニティ参加必携！ この本で bilibili、AcFun、Weibo に乗り込もう。中華圏で使われているオタク用語をまとめた初の辞典。マンガ、アニメ、ゲーム、アイドル、二次創作、エロなどに関する言葉を集成。怒濤の163項目に加え、コラムとして、10年前から現在までのネットサービスを振り返る、中華インターネット史、SNSデビューのTipsを掲載。日本と中国のコンテンツ環境を知るために、生きた中国語教材として中国語のレベルアップに、国を超えたダイナミックな言語運用を知るために、必携の一冊。